明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四巻

第八號

明治三十九年八月一日發行

Dai 4 Kan. KATEI ZASSHI Dai 8 Gō.

安き眠（彦）……一
古山の情話（下）（堺利彦）……二
兒童教育の基礎（久田生譯述）……一一
茄子の苗（上司小劍）……一五
家庭問題の根本的解決（深尾韶）……二〇
跛の娘（白柳秀湖）……二三
婦人は何故に不淨なるか（中尾清太郎）……二八
菜食實行法（大石祿亭）……三三
同病相憐の記（中）（石隣生）……三五
菜食論（二）（加藤時次郎）……四一
軍人崇拜熱と當今の女子（赤羽生）……四八
新刊紹介……五三
由分社より……五三
ローマ字欄……五五
△からだのため△一つの彈丸で獲物二つ△ひと口ひと筆

由分社

東京市麹町區元園町壹丁目廿七番地



クラブ洗粉
CLUB WASHING POWDER
最も善良なるトイレットとして愛用せらる
此のクラブ洗粉をクリモラとミルク及び卵と
舶来石鹸の貴重なる四原料のポーダーを以て
謹製せられたり
帝國化粧品倶樂部
總代理店 中山太陽堂
神戸本店
大阪支店

夏期に於ける絶好讀物

東京毎日新聞記者　木下尚江原著
帝國文科大學講師　ロイド博士譯

英譯　良人之自白

第二編（七月發賣）　定價 金七十錢 郵税六錢
第一編（既刊）　定價 金六十錢 郵税四錢

右今回第二編を發刊す、原作は近時文壇を騒がしたる傑作、譯者は多年本邦にありて文科大學に教鞭を執り斯道に名聲高き人、行文流暢他に比なし、眞に是れ英文研究者に向つて趣味と實益とを得る唯一の珍寶

山東塚越芳太郎先生著



新刊　全一冊（一日既刊）

要目

●日本の地中海●瀬戸内海の特色（如何に日本の開化に貢獻すべき資格ある乎）○好良なる姿勢○和適なる氣象○豐饒なる沿岸○好風景の海●過去の瀬戸内海（如何に日本の開化に貢獻する處ありたる乎）○日本開化の搖籃○海の日本の中心○經濟的日本の中心○內海開化の特色●將來の瀬戸內海（如何に日本の開化に貢獻する所あるべき乎）○太平洋の中央市場○世界の中央公園●瀬戸內海讃歌

瀬戸內海と日本の開化との關係を研究したる者本書也此の日本の地中海が如何に海の日本の母たる乎如何に日本開化の母たる乎は本書の說く所其着想の奇峭なる共行文の鮮麗なる亦一讀の値あるべし

定價 金三十錢 郵税六錢

發行所　東京麴町區有樂町三丁目一番地　有樂社

木下尚江著

小説 **良人の自白** 續編

續篇將に賣切れんとす

上篇 十二版
中篇 十版
下篇 九版

一冊五十五錢
郵税八錢
郵券代用一割増

各冊金卅五錢
郵税各六錢

木下尚江著

小説 **火の柱**

（第十三版）

一冊金三十五錢
郵税一冊金六錢

大倉桃郎著

小説 **舊山河** 小説

滿谷國四郎 齋藤松洲 畫

貧の故に郷黨に捨てられ、戀の故に友に嫉まれ、老ひたる父と、病める妹と可憐の戀人とを殘して、孤影悄然國家の召に應じたる一士卒が硝煙彈雨の間に、不思議にも一命を拾ひて歸り來れば、あはれ舊山河依稀として、我家の軒は殆ど頽廢せんとす、戀人は黄金の爲に人に奪はれ、父は死に瀕して愛兒が注ぐ末期の一滴を俟ちつゝあるを見て、丈夫亦爲す所を知らず、茫然我を失はんとす、偶戀人が權門を捨てゝ來るを描いて末段一層の慘美を加ふ、慘としてこれ戰爭の生める一篇の哀史也。著者は曩に「琵琶歌」の一傑作を文旗に寄與したるの人、本書亦世を驚かすに足るものあらん

金六拾錢 郵税八錢

發兌元 東京市京橋區五郎兵衛町 金尾文淵堂

SK 携帯電燈



衛生
火災
地震
旅行
其他
本品

（定價金六圓）學生及び旅行家に適す

家は必ず備へ置かれよ、睡眠中枕頭に燈火を點じ置くは非常なる大害あり、失火を恐れ玉ふ方は必ず備へ置かれよ、火は多く睡眠中の燈火より起る

盗難等を憂へ玉ふ方は必ず備へ置かれよ不慮の危險に際しては燈火は直に間に合はぬもの也

航海家は必ず備へ置かれよ、提燈、ガス燈の如く風雨に消燈する氣遣ひ無し

軍人、警察、醫師、會社銀行學校等の宿直室、倉庫、油業、坑業家とは欠くべからざる文明的常備品也

本品は斯業の老舗にして最信用ある東京新橋田中商會の製造にして堅牢優美なる逸品たる事は既に定評あり

定價金四圓五十錢、送料十五錢、引換小包にも應ず説明書は御申越次第、無料にて送呈す



特約販賣店　東京市青山南町五丁目七十八番地　有隣商店

ローヤル水ハ
最モ高等ナル最モ進歩セル最モ名譽アル化粧水ナリ
定價 拾錢 拾五錢 廿五錢

ローヤル白粉ハ
最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ
定價 拾錢 拾五錢 五拾錢

東京銀座壹丁目
發賣元 つやぶきん 佐々木商店





家庭雜誌

第四巻第八號

明治三十九年八月一日發行

安き眠

彦

◎死といふ事の、恐ろしく、悲しく、苦しく思はるゝは、若くして死に、病に罹りて死に、思ふ事を爲し得ず又心にかゝる事の多くを殘して死ぬるが故である。

◎若し七十、八十、九十までも生きて、思ふまゝの事を爲し遂げ、子孫の爲にも何憂ふる事もなく、年と共に有らゆる慾情煩惱より解脱し、自然に老衰して寂滅するならば、苦しき事も、悲しき事も、恐ろしき事もあるまいと思ふ。

◎されば死を一大事といふのも、主として此の世の中が不完全で、病氣だの、貧乏だのと、色々の苦勞心配が絶えぬからの事である。

◎若し衣食住安全の新社會が現出せられて、衛生の事も行届き、學術も進歩し、何人も苦勞心配なくして各々其の專門の業を勵み、十分に長生して善き老人となり、何の心殘りもなくして遂に安き眠に入る事とならば、今日の樣な六かしい（不自然な）宗教に依らずとも、人は皆な容易に安心を得るであらうと思ふ。

故山の情話（下）

堺利彦稿

◎今日は又半日つぶして、濱田平太郎（仇名は平カン）君の一家の内情を君に語らう。僕に若し小説家の筆があるならば、實に是れ好箇の短篇であるのだけれど、悲しいかな僕には只だ聞いたなり見たなりを歴史的に叙述するより外はない。間々之に評論を加ふるは蓋し筆者憤慨の餘に出づると云爾。

◎君も善く覺えて居るであらう。濱田の家は荒谷の山の麓の、あの小川の邊にある。道に沿うて十五間ばかり、低い石垣の上に、厚い厚い杉垣を眞四角に苅りこんで、如何にも恰好よく陣を取つて居る。其杉垣の内に横長く建てられた、瓦葺の頑丈な平家も其の儘である。只だ變つたのは、杉垣が彌々厚く彌々高くなつたのと、裏手の方に脊の高い二棟の倉が建てられたのとである。それで遠方から此の邸宅を望めば、横長い杉垣の綠と脊の高い倉の白壁とが、頗る善き風致を成

して居る。僕等は小供の時、此の十五間の杉垣の、七分三分の處にある門の脇に、屢々馬の繫がれたのを見て、あれは小作の百姓が年貢米を運んで來るのだと敎へられた事と、平カンの小父さんが折々右の手に鐵砲を肩げて、左の手に雉子を提げて、案山子の樣な風體をして山から歸つて來るのを見た事との外、別に何等の知る所は無かつた。只だ其の門前の馬の毛を拔きに行つて叱られたり、平カン君の忰平吉（我々よりは大ぶん年下の、あの色の白いおとなしい先生）を、なぶりものにして叱られたりした位なものだ。

◎然るに、前便にもチョット書いて置いた通り、平カン君は近在の百姓に金を貸付けて居たのだ。田地を抵當にして金を貸付けて、殘酷非道な事をしてドシ／＼と抵當流れにしてしまひ、瞬く間に近隣屈指の大地主となりすましたのだ。彼の二棟の新しき倉は即ち其結果である。

◎然るに大地主としての平カン君は、更に一層の殘酷非道を働いて、鬼地主の名を近隣の郡村に響きわたら

せた。彼が縮れ毛の頭の半ば禿げあがつた所を、銅の如くテカ〳〵させて、澁紙に小皺の依つたる如き顔に鳶の如き眼を光らせて、眞鍮の雁首の大きな奴を頑丈な厚緣の火鉢に叩きつけながら、小作人を頭ごなしに叱りつけて居る處を見た者は、鬼地主の名、實に空しからずとて、誰も彼も呆れた餘りに感心して居つたのだ。

◎處が或年の秋、小作は遂に堪へきれずして、三四十人同盟して濱田家の門に押し寄せた。丁度雨風の日であつたので、彼等が簑笠に身を甲うて打群れて來た處は、實に凄まじきものであつたと云ふ事だ。然し彼等も最初は只だ哀訴の形式を取つて、總代三名のみが平カン君に面會して小作米減額の要求を爲し、殘る者共は彼の杉垣の内外に三々五々として控へて居たが、平カン君が例の鬼地主の本性を現はして、威丈高になつて總代を叱り飛ばし、今や足蹴にも及ばんずる見幕を示したので、戸口に近く居た簑笠が三五人、先づ總代掩護の爲に入つて來る、續いて門の内外なる大勢がス

ワ事こそ起つたれと、ドヤ〳〵〳〵と押しかける。平カン君之を見て、弱味を見せては叶ふまじと、例の雉擊の鐵砲を持出して、寄らば擊たんと身構へる、百姓共はアリヤ〳〵〳〵と土間に群がつて鬨を作る、丸で芝居の百姓一揆を見る樣であつたと云ふ事だ。それから平カン君は遂に飛道具の威力を以て百姓共を門外に追ひ退け、戸口にシカと錠をおろし、細君お喜勢をして椽側の雨戸を閉めさせ、茲に籠城の準備を整へ、而も自分獨はコソ〳〵と倉の二階に隱れ忍び、下男何某をば脊戸口より山路傳ひに警察に走らせた。簑笠の連中は此の籠城の體を見て、杉垣を破り門を毀ち、鬨を作つては石を投げ、さすがに雨戸を叩き破るほどの勇氣もなく、ワイ〳〵ガヤ〳〵と騷いで居たが、やがて巡査が五六人、山手の方より駈けつけたので、それ來た逃げろと右往左往、姿も見えずなつたりけり。

◎と云ふと如何にも僕が見た樣だが、實は又聞の又聞だ。若し僕が其の實景を見て居ると、それこそ名文が出來るのだけれど仕方がない。若し僕が其時に居あは

せて、何か不思議の術で以て、壁でも屋根でも透して見ると云ふ眼力があつたならば、平カン君が倉の二階でブル／＼震へて居る處だの、細君お喜勢がアノ田螺の樣な顏をして、うろたへまはつて居た處だの、事細かに君に報ずる事が出來たのだけれど、惜しい事をした。

◎其後平カン君の小作人に對する態度は一層の殘酷を加へた。但し一面に於ける此殘酷は他の一面に於ける恐怖の結果で、彼は此時より以後著しく家の戸締を嚴重にした。即ち總ての戸の掛金を更に丈夫に作りかへ、是まで無かつたオトシを新に作り、猶ほ心張棒を以て之に加へた。それから又、門の扉をも樫の厚板を以て作りかへ、其上には槍の穗の如き鐵の忍び返しを着けた。例の十五間の杉垣は厚くして且つ高く、倔強の城壁を成して居るが只だ憾むらくば裾の方の葉が少し枯れて、犬なんどの忍び入るべき穴を處々に生じたので、平カン君乃ち一策を案出して、其の根元一面に刺の深き枳殼を植ゑつけた。是で城の前面には申分なき防禦

工事が施されたが、猶ほ背面攻擊に對する設備が無くてはならぬ、平カン君茲に於て遂に萬里の長城を築き建てた。即ち濱田城の前面の杉垣の兩端より起りて、家と倉と菜園とを圍み、裏の山の斷崖に連なる長さ凡そ六十間、高さ凡そ一間半の塀を作つた。此塀は煉瓦を以て積みあげられ其頂上にはセメントの間に硝子の破片が一面に植ゑられてある。

◎斯くても彼は猶ほ安心が出來ずして、大枚十圓の金を投じて六連發のピストル一挺を買つた。彼は又父祖傳來の村正の古刀を以て仕込杖を作つた。彼は每夜の枕元に此二武器を備へつけて纔かに其眠を安くし得たのである。それでもフト夜中に眼のさめた時など、表の方に何やら物音のするのを聞いて若しや我に意趣ある者の忍び込むにはあらざるかと、態々起きてカンテラを燈し、家の周圍を三遍ほど見まはつて、そして漸く又床に入ると云ふほど深く神經を痛めて居た。そこで彼は更に或人の勸に依つて、大きな西洋犬二疋を飼つた。此犬は殆んど人間一人前の飯を食ふのと、折々

牛肉を食はせてやらねばならぬと云ふのとで、平カン君實は大ぶん躊躇して居たが、其のパウワウ、パウワウと云ふ吠え方が、如何にも頼もしく思はれたので、遂に意を決して買つて來たのである。此犬を飼つてより以後、平カン君はお陰を以て夜中我家の周圍を三遍まはる事だけを免れた。

◎是でも平カン君は猶は十分に安心する事が出來なんだ。彼は更に考へを回して、警察官と深交を結ぶ事にした。蓑笠一件以來、顏なじみになつて居る巡査等を、屡々招待しては小酒盛を催した。時には又、折角擊つて來た雉の一番を、謹んで警部殿に進上した。嗚呼、嗚呼、人の作つた米を取上げるには斯んなに心配せねばならんものかなア。君よく考へて見て與れ。實に淺ましい世の中ぢやアないか。

◎然るに或年の冬、又一事件が濱田家の門内に起つた。霜の嚴しき或朝、細君お喜勢(即ち田螺のオバさん)が座敷の雨戸を一二枚繰りあけると、まだ薄あかりで善くは見えぬが、庭の櫻の枝に何やら白い物がブラリと

下つて居る。ハテおかしな物がとオバさん怪みながら、ためつ、すがめつ、見て居たが、忽ちキヤツと叫んだまゝ、バツタリそこに倒れてしまつた。人々何事ぞと駈けつけて善く見るに、げに驚くべし、櫻の枝にブラさがつたのは首つりの女であつた。ボロ〳〵の着物を着て、首をガクリと下げて、手足をブラリと垂れた姿、固より息は絶えて居たが、更に驚くべきは、其脊に二ツ兒を縛りつけて居る事であつた。其兒も固より死んで居た。

◎サア大變と云ふので、例の懇意な某巡査を煩はして、段々と取調べた處、是は外でもない、濱田家の小作人何某の妻と子で、何某は平カン君の督促に堪へ得ずして數日前逃亡したのであつた。そして其の餓に迫りたる妻と子が、せめてもの怨を報いんが爲め、杉垣の下より潜りこみて、其の死處を此處に選んだのであつた。嗚呼君、鬼地主は其城壁を高うして、内にはピストルと仕込杖と猛犬とを備へ、外には警部巡査と結んで警察力を味方にしたので、小作人は遂に反抗の力を

失ひ、纔かに此の方法を以て其怨を報いたのである。

◎さすがの平カン君も是には少々避易した樣子であつたが、然し彼れの石心鐵膓は是式の事に溶かされる者ではなかつた。彼は只だ杉垣の下の枳殻を更に繁く植ゑこんだばかりで、他に何等の變ずる所もなかつた。然るに彼れの敵は彼れの家内より起つた。地主制度に對する反抗は彼れの子の心中より湧き起つた。

◎君はあの色の白い、おとなしい、濱田平吉君を記臆するであらう。彼は平カン君と田螺のオバさんとの、其の孰れにも似たものとは思はれない。兎にかく彼は大地主の子として、鷹揚にして善良なる若者となつた。彼は少しく病氣であつたが故に、中學校をも卒業するに至らずして退學したが、彼は天性讀書を好んで他の若旦那連が酒に耽り、煙草を嗜み、自轉車を弄ぶ間に、彼は獨り新刊道樂に耽つて居た。平カン君は其子に對しても甚だ嚴酷で、小使錢の一圓と雖も理由なしに與へた事は無いが、田螺のオバさんに至つては鳶が鷹を生んだ氣で平吉の爲には其の縮りよき財布の口を幾ら

でも開くを辭せず、平吉は之に依つて自由に新刊の書籍を買ひ東京の新聞も一二種、雜誌も四五種ばかり取つて居た。實に君、此の豐津の原としては、殊に平カン君と田螺のオバさんとの子としては、珍らしい鷹が生れたものだよ。それで平吉は自然に養ひ來つた新思想の光を以て、漸く我家の内部を照して見る事になつた。彼は彼れの父が鬼地主と稱せられて居る事も知つて居た。彼は例の簑笠事件をも目撃した。殊に首つり事件に至つて最も深く感ずる所があつた。

◎然るに、彼れの心中に斯くの如き革命の火の子の燃えはじめて居る間に、平カン君は只だ猶ほ一個の子供として平吉を遇して居た。平カン君の目には、寧ろ意久地なしの、役立たずの、歯がゆき我子であつたに相違ない。そして此の役立たずの子の爲に、生涯安全なるべき丈の財産を殘さんには、更に一層の精勵努力を要すると思つて居たに相違ない。斯くて父は益々人の血を絞つて其富を大にせんと努め、子は愈々我家の事業を淺ましきものに思ひなして來た。そして田螺のオ

パさんは何んにも知らず、嫁を早く、嫁を早くと、只だ其事ばかり云ひくらして居た。

◎平吉は首つり事件のあつた以後、倉の二階に書齋を拵へて、そこに引籠つてしまつた。父母とは飯を食ふ時に顔を見合はせるばかりで、碌々話をする事さへ無かつた。平カン君はそれにも一向無頓着であつたが、田螺のオバさんは酷くそれを心配して、若い者を獨で置くと兎かく氣病が出るもの、それに付けても嫁を早くと、いよ〳〵嫁詮索に取かゝつた。

◎濱田家には親戚とても別に近しいのは無いが、只一軒、田螺のオバさんの姉の家がある。此姉さんは丁度狸の樣な顔をした人で、其娘に猫の樣な目をした可愛らしいのがあつた。いとこ夫婦は隨分我々の國でハヤリものぢやないか。田螺のオバさんが此娘（名はお小夜）を胸算に入れたは當然の事であらう。尤も是は狸の姉さんの方からも強ての望みで、是非そうして此二軒を一家同樣にして貰ひたいと云ふ事であつた。實は狸の姉さんの家が近來大ぶん左前であるので、此結婚に依つて何時か濱田家の餘澤に濕ひたいと云ふ魂膽もあつたのだ。濱田家の方に於ては又、田螺のオバさんは我姪を嫁にして置けば、他人を嫁にしたよりは、行々我儘も出來ると云ふ思はくもあり、平カン君は何よりも先づ、親類の家より嫁を貰へば萬事が手輕にはかどつて、要するに物入が少くて濟むと云ふ算盤をはぢいて居たのだ。そこで本人同志を除いては、双方の話が頗る都合よく進行した。

◎それから隨分無茶な話だが、田螺のオバさんが始めて其事を平吉に話した。お小夜をお前の嫁に貰ふことに極めたと。處が平吉は只だ厭だ厭だとばかり云つて丸で母親の話を寄せつけぬ。是には田螺のオバさんも聊か閉口したが、それでも内心に高を括つて『平吉の變人があんな事は云うて居つても、若い娘が傍に來たら、萬更惡い心地もすまい』と、一廉粋を利かした氣で、姉妹の中に何と相談を極めた事やら、兎にかく娘分としてお小夜を濱田家に連れて來た。

◎然るにだ、憐むべし、お小夜にも又別に思ふ所があ

つたのだ、それは近處の青年で、家貧にして小學校の先生をして居たが、中々シッカリした男だと云ふ事だ。そして、其事は狸の姉さんも善く知つて居て、一時は隨分それを許しそうな氣振を見せた事もあつたのだ。然るに濱田の話が始まつて以來、丸で其方の事は忘れた樣な顏をして、平吉、平吉と平吉の事を譽めちぎつて、強いてお小夜を說き勸めた。お小夜は母を怨みもしたが、いたづらでも仕て居たかと、無い腹を探られるのが殘念なばつかりに、進まぬ色は見せながらも遂に一言の否みも爲し得なかつた。母親なんと云ふ俗物は實に君、無情極まる者ぢやないか。自分等の年寄つた我慾の考へから、若い時の心持も忘れてしまつて、思ひやりも無ければ味もない、何といふ淺薄な人間共だらう。それだから僕は腹いせに田螺だの、狸だのと云つてやるのだ。

◎斯くてお小夜は娘分として濱田家に迎へられた。母親達の考へでは、猫の前に鰹節を置く樣なものだと思つて居たのであらうが、中々そうは行かぬ。お小夜は

田螺（もう是からオバさんの尊稱を廢する）に云ひつけられて、倉の二階に茶を持つて行つたり、菓子を持つて行つたりするけれど、平吉は濟まぬ顏をして只お辭儀ばかり仕て居る。面白くもなければ可笑しくもない。お小夜の心も實は亦た遙かの空に飛んで居る。こんな風では何時まで經つても火が燃えつきそうもない、それでも田螺や狸には此の人間の心理作用が分らないでズン／＼と婚禮の用意を運ばせて居た。嗚呼僕は繰返して云ふ、母親なんと云ふ耄碌婆は實に殘忍極まる者である。我息子と我娘とを強いて、斯くの如き冷たき軀を相抱かせんが爲に、婚禮といふ虛僞なる儀式を行はんとするのである。實に君、憤慨に堪へんぢやないか。僕は滿腹の同情をお小夜君と平吉君とに寄せざるを得ぬ。

◎それでも仕方がない、婚禮の日が近づいた。田螺は平吉とお小夜とに其旨を告げた。お小夜は默つて居た、平吉は『知らん』と云つた。それでも田螺は悟らなかつた。婚禮はいよ／＼明日となつた。手輕にもせよ略式にも

く花婿花嫁の紋付も出來て居る。仲人の何某が高砂を謡ふ筈にもなつて居る。濱田家は殆んど前古未曾有の騒ぎであつた。

◎處が茲に痛快なる一事が起つた。今夜婚禮といふ其日の朝になつて、肝腎の花婿の姿が見えぬと云ふのだ。我が平吉君、遂に斷乎として決する所があつたのだ。彼は父の金三百圓を窃かに頂戴して、夜に乘じて逃亡したのである。君或は疑ふであらう。平吉は何故に今日まで優柔不斷の態度を取つて居たかと。然しそれは君、察してやらなければならない。彼は實におとなしき善良な男であるのだ。今日まで苦悶煩悶した事は何の位だか知れない。彼が倉の二階に引籠つたのは即ち第一の逃亡であつたのだ。而も再び結婚問題に依つて攻め寄せられたので遂に第二の逃亡を斷行するに至つたのである。

◎何にしても此逃亡は實に痛快極まるでは無いか。僕は其時の田螺のうろたへた面が見てやりたかつたよ。平吉は其の逃亡に際して、父とお小夜とに宛て丶各一

通の短き置手紙をした。父に宛てた分には、父の强慾を切諫して『兒は鬼地主の子たるを耻づ』と云ふ樣な事が書いてあつたそうだ。平カン君は之を見て、其の藥鑵頭に生へ殘つた縮れ毛を搔きむしるばかりにして怒つた。それからお小夜に宛てた分には『おん身はおん身の眞に愛する人と結婚せよ』と書いてあつた。お小夜は初め平吉の逃亡を聞いた時に、ワツト聲を上げて泣き伏したが、此の置手紙を見るに及んで、初めて愕然として驚き醒めた。あ丶先づ逃亡すべき者は我身であつたものをといふのが蓋し此時のお小夜の心であつたらうと思ふ。

◎田螺のオバさん(憫然なるが故に再び尊稱を與ふ)は其日一日只だ譯もなく泣いて居た。『平吉あんまりちや、平吉あんまりちや』『お小夜に濟まぬ、お小夜に濟まぬ』など丶云ふ所は、丸で狂氣の樣であつた。平カン君は又ヤケ酒をあをりながら『あの樣な不埒な奴はモウ勘當してしまふ。そしてお小夜に養子をして家の跡を嗣がせる』と、丸で人形の首を繼ぎかへる樣な事

を云つて居た。其夜、婚禮の酒盛が善放處分の親類會議に代つたドクサクサまぎれに、お小夜も亦た窃かに逃亡してしまつた。

◎お小夜の行衛は久しく知なかつた。平吉はそれから間もなく東京に居る事が知れた。平カン君は早速廢嫡の旨を平吉に傳へた。平吉は喜んで之に應じた。所が法律は容易に之を許さぬ。法律は是まで平カン君の債權を保護して、常に平かん君に便宜を與へたが、玆に至つては頑固にも平カン君の意に反して平吉の相續權を保護するのである。『己の財産を誰に讓らうと巳の勝手ぢや』『子を勘當するのは親の權利ぢや』などゝ平カン君大いに氣焔を吐いて見たがダメであつた。

◎然るに其年(即ち昨年)の暮、意外にも平カン君が頓死した。人間も脆いものだよ、あの打殺しても死にそうもなかつた平カン君が一夜の間にコロリと參つた。小作人等は定めし大杯を舉げて之を祝した事だらう。總て天下の事がこんな具合に行くと、革命事業のはかどりも早いのだけれど、どうも中々命の長い奴が多く

て困るよ、ハツハヽヽヽ。それは兎もあれ平カン君が死んで見れば、平吉君も歸つて來ぬ譯に行かぬ。廢嫡も何もあつたものではない。平カン君が死んだ以上は濱田家の家督と財産とは既に平吉君の有となつて居るのだ。平吉君は電報に應じて早速歸つて來た。然し彼は依然として倉の二階に籠つて居る。母親が何と云つても承知しない。そこで田螺のオバさん詮方なく、近來めつきり殖えた其の白髮の頭を振亂して、『此の濱田の家』を潰してはならぬと云つて、一生懸命、夫の代りを勤める事になつた。そして誰云ふとなく『鬼婆、鬼婆』といふ名が立た。小作人は又泣て居る事だらう。

◎以上が濱田家の今日までの歷史で、將來は如何に成り行くか知らぬが、いつぞや平吉君が窃かに僕に語つた所に依れば、其田地と家屋敷とを悉く棄賣にして何處か他國に行きたいとも云つて居た。或は又、田地を悉く小作人に分ち與へてしまはうかとも云つて居た。何れにせよ、田螺のオバさんが目を眠れば、平カン君の遺業はそれと同時に潰れてしまふのだ。そして鬼の名が始めて濱田家から取去られるであらう。あゝ永々と書き立てたが話は是でお仕舞だ。お小夜さんは廣島あたりで看護婦の修業をして居るとか。せよ、兎にか

兒童教育の基礎

＝自然と兒童＝

久田生譯述

田舍の兒童は甚だ幸福也。自然てふ大慈母の膝元近く、活氣ある諸物の間に幼時の生涯を送る、如何に幸なる哉。ちよこ〱とよろけ歩るく可憐の者よ、彼は太陽の光を浴びて綠草の中に横はり、綠茂げれる森の下陰に、玉と涼しき涓滴を掬ぶ。彼は又た生きたる自然の間に住みて、羽翼或は毛皮を飾れる彼等の兄弟と手に手をとり、干渉好きなる媒介者の力を多く借ることなしに、自然てふ親愛なる母の許に直接稚兒としての敎科を學び得る也。　（ケイト　ドーグラス　ウイギン）

兒童に良き健康を保たせるといふことは、先づ敎育の必要條件、根本目的として認めねばならぬ。隨つて校舍、敎師、敎科、敎授細目、敎授方法などの價値は兒童の身体及精神の健康を昇進するの度に依つて決定せねばならぬのに、過去及現在に於ける敎育は、此の點に於て缺け目あるばかりでなく、不用のものを浪費し而も不自然であること甚しいものである。兒童は其健康の爲め、自づから新鮮なる空氣、麗らかなる日光、善良なる交友、過去虛弱の恢復、適當なる營養、規律ある習慣、正しき姿勢、適宜の硏學、淸潔なる器物、健全なる精神刺戟、及び中庸の勞働を要求するのに、敎育は更に之を思はず、社會も又た毫も此の要素を供給する根本目的について考究しやうとしない。ホール氏が巧妙な言辭を以て、健康は神聖にして無上に貴いものだと丈けはいふて居るけれども、さて其の育てつつある兒童に向つての、良き健康を與ふる要素は足らぬ勝ちである。併しこれは社會の缺點で、一には又た敎育者が覺醒しないからである。

それは扨て措き、美なる外界に對する彼等兒童の愛、即ち日照及び日光に對するその本能を以てすれば、休憩時間又たは休暇の近づくを喜ぶは自然のことで、毫も怪むに足らぬのである。鉢植の草木は日光を充分與

へる爲めに窓外へ出すではないか。然るに同じ自然物たる人間にも同樣の要求あるを知らないで、側面から僅かな光線の入つて來る穴のやうなところへ閉ぢ込めて置くとは何事か。ドクトル、エベレット氏も健康に光線浴の必要なことを説いて止まないけれども、兒童が自然界及び太陽の照射に觸れんが爲めに必要なる丈け、その學校敎室に光線は溢れて居るだらうか。各敎室は太陽の直射光線で毎日の消毒を果すほど夫を受けるやうに位置して居るであらうか。總ての病氣の萠芽及び根源は、太陽の照射中に生活が出來ぬといふ其の偉大なる力の應用を實現してあるだらうか。學校の敷地は其全兒童が集り遊ぶに充分であらうか。彼等が太陽の光に浴しながら、或は跳ね廻り、或は遊び戯れるやうに出來て居るだらうか。否、云ふまでもなく現在全學校の敎室は、暗くして腐敗した空氣の充ちたものばかりである。けれど何處〳〵迄も太陽の照射は兒童の修養に必要である。總ての健康な人類は皆な太陽照射中に生活したものばかりである。それだから學校

は普通自然の生活狀態を表現せねば、何時迄も不完全不具不整、無意味のものである。伊太利の古諺にさへ「太陽の行かぬ所へ醫者が行く」と云ふのである。

なほ一歩進んで兒童と自然に對する愛に就て攷へやうか。兎に角、自然は總ての生活の母である。此の大慈母の花園中に最も健全な植物が育つやうに、兒童も常に自然の優さしい母君の懐に抱かれねば完全なる生長が出來ない。勿論兒童は生れながらにして博物學者である。兒童の眼は常に、星の光輝、花の美、又は動物生活の妙なるを視、其の耳は囀聲界の音樂と森林の木精とを聽きて生長するのである。彼の有する天賦の興味は、わざ〳〵彼を覺醒して活動界へ引き入るゝの要もなく、又た自然物を通じて其の慈母に接近させたものに彼を結合するの要もない。唯だ自然に放任し置けば、其天賦の興味によつて自づから總てのことを爲し、又た爲すやうに育つて行く。けれど悲しい哉。兒童は形式的の學校といふものに入るが爲め之を失ふことが多い。即ち形式學校は美しき自然なる兒童心靈の

窓に帳幕を被ふものである。又た教師は自己の頭腦に限られた閉繞物によつて形作つた數尺或は數十尺の精神的入物と、兒童の精神擴張及び眞理發見に築き能ふ所の豐饒にして限り無き宇宙とを交換し、遂に兒童をして其精神的箱を透して物を見、色眼鏡を用ゐるやうにしてしまうのである。一體今の世の中には箱中の教育より他に、之に勝れる教育はないのであらうか。可憐にして怜悧なる兒童は何故人爲的學校生活を得んが爲めに、賴母しい彼れの自然的本能を悉く棄てねばならぬのであらうか。人間最上の興味は書冊に鼻を突きつけ、或は卓上に頸をかがめ、又は年中座食の動物たるに依つて保たれるものであらう乎。いふ迄もなく自然は學校の基本目的であるのに、何故世人は、兒童の勞作と其精靈の活躍せる興味と關係冥合するやうな大外界的眞個自然的なる貴い學校を希望せぬのであらう乎。自然を知るは、評價し難いほど貴い特權ではない乎。自然を愛するは如何にも靈感ありて喜悦に充てる興味ではない乎。自然と調和するは、人の生活をしつゝ天國を目的とする兒童に何たる安全にして高尚なことであらう乎。ロンジフエロー氏も、絕大無限の愛に滿てる自然界が、兒童の教育に及ぼす効驗をよく歌ふて居る。

やさしき自然の御母は
　其膝の上の稚兒に曰ふ
『天の御神が汝が爲めに
　展べし讀物ここにあり
『いざや來れよ我が愛兒
　神ののこせし自然にて
汝が未だ行かぬ場所に行き
　汝が未だ讀まぬ頁見ん』
稚兒は優さしき母君の
　日も夜も無しに歌ひます
宇宙の韻に和しながら
　さまよひつつも進みけり
かよわき足に逍遙く
　稚兒の心のおとろへば

歌はも妙になりまさり
奇しき景色は展べらるる

どうしても自然は總ての生活又は人生の母である。自然といふ優さしい母の搖籃中に於てこそ、赤兒は其生長力を得、病餘の人は營養を恢復されるのである。又た教育を受け得なかつた人々には、自然は其の視覺にうつたへて己れ自らを説明し、遂に人の心を惹いて、親密なる友とし、其の兒としてしまふのである。殊に夜の星、晝の花に關する兒童永久の疑問、緑の牧場や茂れる樹木の美趣に對する彼等の愛。流るる水、歌ふ鳥、跳ねる小動物に對する喜悦な、ど皆な總て原人時から保つて居た豊富にして善良な本能である。永く人爲的生活と接觸しながら猶ほ此自然界の美に對する愛を失はぬ兒童に勝つて幸福な生涯はないであらう。更らに猶ほ山嶽の豪宕、洋濤の雄大、明媚なる風景、清秀なる江湖、恍惶たる星、深邃なる森林、精美なる花、奇しき鳥の音樂と其の色、及び全自然物の生活順序及び其完全なる一致の中には、一種不可思議なる神秘

の力があり、其含蓄する絶えぬ平和の呼吸は、人を導き教へねば止まない所の力を持つて居る。

神は田舍を作り人は都會を作る。土壤及び草木に接しながら、其幼時を田園の間に送るは最も大なる幸福で、之れに反し曾て土を掘り肥土を碎かず、また種子を蒔いたことのない兒童は實に不幸此上なしといはねばならぬ。兒童が苗及び植物を、恰度自分の稚兒のやうに思ひ、堀り植え育て培ふことは、其の教育の上に於て、必要にして大切なことだから、都會では其の益々人爲的生活に赴く情勢に抗し根本元素と接觸する昔の狀に返へさんとすること、其の學校の最大天職である。健全なる兒童は太陽の光を浴びながら生活し、土壤に觸れ自然に接し、生ある自然物を育てねば生長發育しないのである。吾人は何時迄も人間最初の樂土、エデンの花園を忘れることが斷じて出來ない。

△風たてば浮世輪廻の姿よと歎してめぐる風車かな。

茄子の苗

上司小劒

僕は東京に來てから、五たび住居を更へた。初めは築地に、次は神田に、次は芝に、次は麻布にと、段々場末へ追はれて來たが、今は目黒に近い白金の、名ばかりは今里町と云ふ、森の中の藁屋根の家に住んで居る。但し築地と神田とは下宿屋で、芝と麻布とが長屋で、一軒だちの家へ住んだのは、今の藁屋根が初めだ。これから追々と出世をして、杉の生垣か、煉瓦の高塀を廻らした、堂々たる家へ住むやうになりたいものだと、家の者は云ふが、それは及びもつかぬことで、今度はまた長屋に、長屋から下宿屋にと、元來た道を後戻りしさうだ。僕が今後若し生垣を廻らしたところへ住むとすれば、それは青山墓地のカナメの垣の中であらう。しかし僕のやうな貧乏人は、青山の土の下へ入つても、廣瀨中佐や、副島種臣君やと、石塔の高さを競ふほどの貲力は無く、また死んだ後までも、下劣な名譽心を石に刻りつけて、後の世に遺さうとは思はないから、まづ〳〵僕の住居は、現在未來を通じて、今の藁屋根が一世一代であらう。

僕の今の住居は、藁屋根の見苦しい家だが、場末だけに、空地が可なり廣くて、庭もあれば畠もある。無論廣いと云つても知れたもので、往來の人に廻はり道をさせるほど、だゝッ廣くはない。元來、一人で二町四面も三町四面もある大きな屋敷を構へて、往來の人に廻はり道をさせて、平氣でゐるのは、怪しからんことだと思ふ。僕が勤めに出る爲めに、毎日通る道にも、松平何某の大きな屋敷が途中に横はつて居て、少くとも二町は廻はり道をしなければならぬ。一回に二町餘計に歩くのだから、往復二回、即はち一日に四町の無駄足をさせられる譯で、十日に四十町、一ヶ月に百二十町、一ヶ年に一千四百四十町、丁ど四十里の無駄足をさせられることになる。僕が假りに五十歳になるまでこの道を往復するものとすれば、これからまだ二十年もあるから、八百里からの無駄足をしなければなら

ぬことになる。八百里の無駄足、これ實に容易ならん勢力ではないか。八百里無駄足をする代りに、其の足數だけ米を搗けば、小さな水車ぐらゐの仕事は出來る。それにこの松平何某の爲めに、毎日廻はり道をさせられるのは、僕一人で無く、また、大きな屋敷を構へて、往來の人に廻はり道をさせて、平氣で居るのは、世の中に、この松平何某だけではないから、こゝに、世界中の人が、大きな屋敷の爲めに、廻り道をする足數を統計にあげたら、地球を一周するぐらゐは愚か、太陽へも届くほどの長さになるであらう。

話が横道へ外れて失禮した。扨僕は今住んで居る其の藁屋根の家の畠に、今年初めて、茄子の苗を三本植ゑた。イヤ僕が植ゑたのではない、家の者が近所の百姓から貰つて來て植ゑたのだ。家の者が百姓に教はつて來たと云ふのを聞くと、茄子の苗は、何んでも三尺も間をあけて植ゑなければ駄目ださうで、餘り廣くはない僕の家の畠には、三尺も間をあけると三本より多くは植ゑられないのだ。一寸斷つておく、こゝに所謂『駄

目』と云ふのは、實がならんと云ふことで、つまり人間に取つて駄目なのだ、茄子自身には駄目だかドウだか分らない。百姓の言葉に據ると、茄子の苗が曾て盛るところの畠で『若し我々の葉と葉とが、くッつかないやうに、植ゑて呉れたら、千個の實を生らせて見せる』と獨言を云つたと云ふことだが、ドウもこれは當てにならぬ。植物學の教ゆるところによると、植物に實が生るのは、木が衰弱した爲めに、後繼者を作るのである。即ち茄子も衰弱しなければ實は生らないのだ、衰弱したから已むを得ず實を生らして、種族の保存を圖るのであつて、人間のやうに衰弱もしないのに子を生んで、健康な身體をしながら、早く左團扇の安樂を得やうとするのとは譯が違う。動物でも、植物でも、己れ自身に自身の衰弱を欲するものは先づ無い。人間が徴兵檢査の前に、わざ／＼近眼鏡をかけて、惡くない眼をわるくしたり、わざ／＼冷いところに腰を据ゑて、痔疾を挑發したりする、僅少の例外を除けば、この自個本位の世の中に、自身の衰弱を欲するものは無いと

見てよからう。さうすると茄子も已れ自身を衰弱させて、千個の實を生らさうとは云ふまい。

全體、人間が茄子の苗を植ゑて、肥料をやつたり、葉についた虫を取つてやつたり、茄子は灰が好きだからと、火鉢の中の足りない灰を都合してかけてやつたりするのは、決して茄子に對する親切ではない、無論自覺心の無い茄子の中には、人間が肥料を呉れたり、已れを迫害する雜草を除いて呉れたりするのを見て、アヽ人間と云ふものは親切なものだ、と心底から有り難涙をこぼして、其の御恩返しには、薄紫、濃紫の、見るからに可味さうな實をドッサリ生らして、已れの一身は人間に捧げたもの、働き得る時に働いておけば、働き得ないやうになつても、あの親切な人間は、屹度大事に世話をして呉れるに違ひないと、安心して居るのもあるやうだが、——イヤそんなのが多いやうだが、——秋風漸く身に染みて、葉は落ち、幹は枯れんとして、モウ何うしても實が生らないとなると、昨日までは、菩薩のやうに優しかつた人間が、今日は夜叉のやうに恐ろしくなつて、情容赦もあらばこそ、枯れかかつた幹を持つて、グイ〳〵と根を引き拔き、モウ『貴樣には用が無い』と抛り出す。大抵の茄子は、この時初めて眼を覺まして、漸く人間の冷酷なことを知るのであるが、畦の上へ拔き棄てられた、淺間しい身體を半ば起して、今まで自身の、天から授けられた住家のやうに思つて居た畠を見ると、大根や蕪やの苗が、新しく植ゑられて、狡猾者とも、惡黨とも譬へやうのない人間は、夏の初めの頃、自分に見せたやうな、優しい笑顏を、大根や蕪に見せて、親切氣にいろ〳〵と世話をして居る。『おい大根さん、蕪さん、お前もまた其の惡黨の餌食になるのかい』、とタッタ一言云つてやりたいは山々ながら、ア、苦しい、モウ聲が出ない。…………

これ實に憐れなる茄子の苗の末路である。

人間社會の躾とか、教育とか云ふことが、躾を受くるもの、教育を受くるもの、利益を目的とせずして、躾をするもの、教育をするもの、利益を目的とし、ある鑄型を設けて、成るべく其の型通りの人間を作らうと

するが如く、茄子の躾、茄子の教育も、無論茄子の利益を目的とせずして、人間の利益を目的として居る。茄子の利益と人間の利益との一致する點はそれでよい。が、茄子の利益と人間の利盛との一致しない點になると、茄子は實に滅茶〱だ。この點に至ると、茄子の人格、イヤ茄子格は、全く人間の爲めに蹂躙されるのである。

かく云ふと、人間は云ふであらう、「いくら威張つても、茄子は人間の保護を受けなければ、生存することが出來ないではないか。人間が肥料をやつたり、雜草を拔いたりしてやるから、茄子は立派に生きて居られるのだが、若し人間が少しも構ひつけなかつたら、茄子は雜草の爲めに攻め立てられて、忽ち枯れてしまふであらう。それだから素直に人間の云ふことを聞いて、人間に服從して居るのが、茄子の利益で、また人間の利益である。温順と、貞淑とは、實に茄子の美德である。」と。しかし、よく考へて見玉へ、茄子を今のやうに弱くして、人間の保護がなければ生きて居られないやう

にしたのは、一體全體、誰れの故だ。今でこそ、風にも堪えぬ弱々しい茄子姫だが、昔はこれでも山野の間に自生し、他の雜草どもと激烈な生存競爭をして、一歩も讓らなかつた茄子阿魔だ。それを人間の口に可味い實が生ると云ふことを、人間に知られたのが、運の盡き、人間の畠に移されて、人間に育てられるやうになつてからは、實こそ段々大きなのが生るやうになつたが、身體は薩張りイクヂが無くなつて、人間の保護が無くては、雜草どもと競爭が出來無いほどの弱いものになつた。御承知の通り、茄子の實は、茄子自身の種族を永久に蕃殖させる爲めに生るのだから、あんな大きな實を生らせる必要は無いのだ。それを人間が己れの慾情から、大きな實を生らせる爲めに、イラヌ世話をして、茄子をこんな弱いものに仕立てゝおきながら、今更保護で候の、獨立の能力が無いのと、幾ら口に稅はかゝらないとて、餘りと云へばヒドイ言ひ草だ。人間の裁判所が、若し公平に茄子の訴訟を受付けてくれるやうになつたら、〃は、今までの損害賠償とし

て、幾億圓かの民事訴訟を提起するであらう。原告茄子、被告人間、などは面白いではないか。

兎に角、茄子が、從順に、貞淑に、所謂茄子らしい茄子になつて居るのは、人間にとつては、この上も無い利益であらうが、それが茄子自身の利益だと云ふことだけは、止めて貰ひたいものである。

＊　＊　＊　＊　＊

夏の日、一日の勤めを終つて、例の松平何某の屋敷の廻はり道に、ピッショリ汗をかいて、家へ歸つて來て、裏の畠の傍で行水をつかひながら、つら〳〵三本の茄子の苗を見ると、彼れは一日を劇しい光線に射られた爲めに、ヒドク弱つて居る。さうして營養不十分の爲めか、葉も幹も痩せて居る。そこで家の者に『もつと肥料をやつては何うだ』と云ふと、『餘り肥料をやると、木ばかり大きくなつて、實が生らないと』百姓が敎へた。』と答へたので、『ア、さうか』と、僕は大に感慨を催ふした。

●ひさし髪

ひさし髪の束髮は、歐羅巴で下女の結ふ髮だと聞いて、俄かにひさし髮をやめた人があるとは面白い。歐羅巴の下女よりもえらいつもりでゐる處が尙更面白い。

●友染の座蒲團

メリンスの友染の座蒲團を敷いて、其前に着物の半分縫ひかけたのと、針箱と、尺と、篦とを置いて、座蒲團の上には誰も居ない。ある日目黑を散歩して、或る家の傍を通つた時、かういふ景色を偷み見て、座ろにゆかしく思ふた。

●禮義

人の前で帽子を脫ぐのが禮義なら、羽織を脫ぐのも禮義、着物脫ぐのも禮義、裸體になるのは大禮義だらうとは、妙な議論だ。（此の三項小劍君著「その日〳〵」より）

家庭問題の 根本的解決

深尾韶

人、青春、渾身の野望燃ゆるが如く、小天地の間に跼蹐するに堪へざるや、憤然として其の野薔薇花さく故園を辭し、小さき雛鳥の今ぞ温かき巢より轉び出でたるが如く、眼は希望に輝き、胸は歡喜に躍りて、匆茫として都門に入り來る。幾千百の男女、吾人は其の或は校門に趨り、或は職業を趁うて、東西に奔馳するの狀を見ざる日はあらず。而して、其の求めて得ざるものあるとき、彼等は直ちに失望し、落膽し、意氣銷沈して、復た疇昔離鄕の勇ありしに似ず。若し夫れ燈火影闇うして雨蕭條たるの夕は、下宿屋樓上、僅かに四疊半を唯一の城廓と賴める遊子の情、思ふに、當に斷腸に値するものあらん。此時彼れの腦中を占領する思ひは、父母兄弟姉妹共に在りし、過ぐる日の我が家の樂しき團欒ならざるべからず。僅かなる酒に醉ひて切りに上機嫌なる父、あの鼈甲の如くなりし長煙管に

煙草をつめつゝ我が行末を語れる母、小さきテーブルを取圍みつゝ共に打興じて箸とりし弟妹、それらの優しき聲、大いなる笑、今も尙ほ我が眼底に彷彿たるに非ずや。我が耳朶に新たなるに非ずや。此の懷かしき記憶を喚び起して、今の生活の無趣味なるに想ひ到れば、歸心矢の如く、旅愁頻りに起りて、家庭てふ一語は殆んど神の福音の如く聞きなさる。成功に誇れる青年男女も此の一語の前には其の智識も要なく、信仰も力なき也。家庭は彼等が唯一の樂園にして、彼等は之なくしては一日も存在し得られざるべく見ゆ。

青春の男女、漸く志せる學業を終ふるや、强烈なる愛を欲求するの情は、やがて其父母や兄弟姉妹の愛を得るに滿足する能はずして、爰に異性の結合を見る。女子は、女學校にて敎へられたる良妻賢母たらんとして、男子は、至上權を有する家長たらんとして、各々長上の羈絆を離れたる家庭に急ぐ。家庭や、家庭や、女子は其の裡に逃れて始めて生活の勞苦を親らするの煩を避け得べく、男子は其上に君臨して始めて奴隸を

有するの便利を味ひ得べし。彼等が相牽ひて家庭を得んとするに急なる、固より怪しむに足らざる也。

されど憐むべし、彼等は唯單に家庭の團欒なるものを夢み得るに過ぎず。見よ、親子夫妻の間に奴隷關係を是認せる今の家族制度は、當然の結果として、家長の至上權より來れる家族の壓制を生み出せるにあらずや。吾等は時として酒色に荒びて一家の事を意とせざる父を見、又時として涙を呑んで其夫の暴虐を忍容する母を見たり。父何が爲めに淫するか、母何が爲めに默するか。皆これ奴隷主義の家族制度が齎らす所の結果にあらずや。此の如くにして家庭の團欒何處に在りや。夫婦親子の愛情何處に在りや。吾人は此の奴隷制度の上に尙ほ讃美を拂はんとする人を憐れむ。

若し夫れ靑春の男女、相愛し相戀ふるの自由、今の奴隷的家族制度に於て何處にか之を求むるを得べき。令孃！子息！これ其の父の最も愛する一個の私有財產に非ずや。唯一個の私有財產なり。一個の物なり。其の戀する所の對手にして些かたりとも父の意に適せざ

るものあらんか、所有者たる父は直ちに其の權利を主張して、一毫も寬假することなけん。其の愛人をして失望せしむるも、將た又之をして死せしむるも、固より彼れの意とする所にあらず。見よ、幾多可憐なる人の子は、其の人の子たるの故を以て、屢々無情なる父の命令の下に、愛せざるに配し、慕ふに別れ、燃ゆるが如き靑春の血を、空しく紅涙に濺げるにあらずや。あゝ現今の奴隷的家族制度に於ける結婚は呪ふべきかな。

而して、此の奴隷制度の下に最下の奴隷として生まれ來りし婦人の地位は、まことに悲しむべきものなくんばあらず。天無情、不幸にして彼等は子宮と卵巢とを有するの故を以て、男子以外、謂はれなく生殖に關する大部分の責任を一身に負はしめられ、從ひて其の體力の弱小を來し、男子と競爭するに堪へざるに至るや、忽ちにして其の經濟的地位を奪はれ、幼なくして先づ父兄の養ふ所となり、長じては夫と舅姑とを衣食の恩人として敬び册かざるべからず。而して尙ほ其の奴隷的地位より逸出せしめざらんが爲めには、其の敎

育の程度種類を制限して、妻たり得、母たり得るまでに止めらる。妻たり得るとは、骨身を惜まず臺所に働きて、權威ある男子に諛らひ、舅姑に媚び得ることにして、母たり得とは、哺乳器兼敎育器となり得る事なり。而して各學校と、各敎育者と、頻りに之を稱揚して、思慮淺き靑年女子をして此の聲に醉はしめずんば止まず。吾人は彼の有爲なる若き婦人の口より洩るゝ、而して彼れが之を以て直ちに彼れの理想となせる『良妻賢母』てふ聲を聞くとき、實に殘酷の感に堪へざる也。あゝ人格を無視せる、而して器械若しくは奴隷の別名なる良妻賢母の名に醉へる者よ、汝は其の自由、獨立、權利、進歩の未だ曾て一毫も許されざる無意味の生活に、何時までか甘んずるを得るものぞ。

嗚呼家庭、此の如くんば竟に何の價値あらんや。何の慕ふべき所あらんや。吾人が目して地上のパラダイスなりと爲せるもの、實は吾人の最も恐るべき陷穽なりしなり、最後の決戰場なりしなり。吾人が先づ此の悄むべき現今の家族制度に對し、結婚制度に對し、賢

母良妻主義に對して否認を表明し、大に反對の態度に出でんとすること固より理の當に然らざるを得ざる所に非ずや。獨り怪しむ、新進の敎育を受けたる人にして、尙ほ吾人の所論に戰慄し、耳目を掩ひ、色を失ふに至る者を見る事を。

嗚呼時非也。靑年尙ほ未だ以て誨ふべからざるか。彼等は捨てられ、打たれ、蹴られ、切り刻まれ、煮られ、食はるゝに至るも尙ほ悟らざる頑冥不靈の動物なり。彼等は其の家族制度に於て先づ胸の眞只中を釘付せられ、結婚制度に於て頭首を斷たれ、經濟的不平等に於て手足を斬り離され、而して賢母良妻主義に至つては全く煮て食はるゝ也。此の如く殘酷なる制度の犧牲となりて、袖に淚の乾く時なきことは、彼等自身と雖も知らざる筈なかるべきに、尙ほ此の頹廢せる舊制度、舊道德の覊絆を脫することを能くせず、いや〳〵ながらも未練を殘して、新制度、新德道に憎惡の感を抱き、若くは冷淡の態度を示し、或は徒らに之に戰慄するは、何たる腑甲斐なきことぞ。何たる卑怯なるこ

とぞ。何たる矛盾せることぞ。憎惡する者は、現制度を何よりも善しとして讃美するもの、固陋太だ說き易からず。冷淡なる者は他年一日、切實に之を悔ゆるの時來らん。而して之に戰慄する者に至つては、『革命』『反對』等の字面の甚だ殺風景なるに怯ぢて、未だ眞の黃金時代を想像する能はざる憐れむべき短視者流に外ならず。彼の愚なる現代の思潮よりして、一步も脫出すること能はざる、神經質的の淸純主義を捨て、虛心坦懷、徐かに世の行く樣を觀ば、腑甲斐なき者も、卑怯なる者も、矛盾せる者も、遂に豁然として大悟し、而して吾人の主張に向つて有力なる援助を與ふるの期なしとは言ふべからず。吾人は其の一日も早く然かあらんことを渴望して止まざるものなり。吾人頃日の言論に對し、世人、特に溫良貞淑なる婦人諸君の、或は多少の疑惧と迷惑とを招かんことを恐れ、一應吾人の所信の由つて來る所を明かにす。吾人は此根本の問題を解決せずして區々の小策に走るを以て、寧ろ滑稽なりと信ずるが故に、殆んど全く他を閑却して顧ることなし。讀者諸君之を諒するや否や。

跛の娘

（一）

白柳秀湖

暮れ行く春の日の靑嵐が、梢に名殘の花を吹いて、何處からともなしに散りかゝる頃の事であつた、自分は堺兄と携へてかの淸水谷の公園に寂しい逍遙をした事があつた。話はいつしか彼の野口曾惠子の運命にうつつたが、其時堺兄が自分に恁んな問題を提出した。

『君野口曾惠子は惡病の血統といふのだが、マアそれ程でないとしても、多少自分の身體に不具な點があるとか、もしくは人並外れて醜い容貌をして居るといふ樣なコンヂションに在る年頃の婦人の寂しさはどんなだろうね。どんな若やかな話の出る席でも何かにつけて遠慮勝ちでね。それもさ、敎育があつて美しい理想に燃えて居るといふ樣な人の場合はなほさらで、智惠の實の味ひの苦さに泣く事も度々であろうぢやあないか。』

自分は幾度かうなづいた。堺兄はなほいふた『それで君、そんな人が自分の親類とか、また友人とかの中にあつたとしたら、君は如何なる態度、如何なる方法によつて、其人を慰めんとするかね。』といふたが、兄は幾度か社會の恐ろしい風波と戰ひ盡して來た『意志』の光を瞳の内にすゑてヂツと自分をみつめた。自分もこれまでそういふ事に思ひ至らぬのでもなかつたが、未だそんなにシミ〳〵と考へて見た事もなかつたので、流石に雄辯な僕も少し閉口した。堺兄は笑ひ出した『年齢の若いといふのは、どうしても爭はれないものだなア、東西兩洋の文明を一處にして論ずる樣な先生でも、こんな問題には一言もなしか。』と冷やかしたが又カラ〳〵と笑つた。

自分は其日の歸途にも幾度か此問題を自分の胸に繰り返して見た。

（二）

何年程以前の事であつたか忘れたけれど、自分は毎日或る時間に或る處でキツト跛の娘に會つた事があつ

た。此娘は或學校へ通つて居たので、毎朝汽車で往復をして居た。勿論此娘一人といふ譯ではない外に一處に通つた連中が澤山あつたけれども、自分が今だに忘れないのは跛の娘の面影ばかりである。娘は先づ幸福な中流の家庭に人となつたものらしい。肉付の好い顏は丸い方で色も白いけれど、決して美人といふ程ヂヤアない。年齢は漸く十七位マア十人並といふのだろう。けれども此娘に只一つ特點がある。それは彼女の眼である。ポツチリとした張の好い睫毛の長い黒目勝の、それはもう、例へば……………そうさね、木曾の小鹿が母を慕ふ樣な可愛さであつた。自分はこれまで片輪の人に接して、悲しい人生の涙の谷に掬んだ事も幾度かであつた。

男性の不具者は大かた意地が張つて、負け惜みが強くつて、其上に根性が曲つて居る。盲目の人が、其前に危險のあるのも知らないで、ポツ〳〵やつて行くのを見て、此方も流石に見兼ねて一寸注意をしてやると、アヽそれは有がたうと一口禮をいふて置けば

好いのに、ニユッと苦々しく笑つたぎり、何だ餘計なお世話だ、そんな事は云はれなくても分つてると云はぬ計の顔をして行く、それはまだ好いとして、中にはそれを口へ出して『ア、そうですねえ』なんとやつてのける人もある。自分は別にそれを憎らしく思ふでもないが、所謂世間にいふ片輪根性といふので、永い猜疑の月日を送る中に、妙な處で意地を張つたり、妙な處で競爭心を起したりして、折角世間から得べき同情も全く失つて、いよ〳〵人生の暗い途ばかりを、よろめき行くのである。

女性の場合はいやさらである。さらぬだに深い猜疑の情、嫉妬の念、一寸人が笑つてもモウ自分の事ではないか、一寸人が話をして居ても、モウ自分の噂ではあるまいかと邪推する。若い人の花やかな話にも、自分はもうそんな事に口を出す資格はない、恁んな事をいふたら反て自分が嘲られるであろうといふ様な風で何かにつけて遠慮がちになる。たとへば春の潮が湧き立つ様な熱い血潮を深く胸に秘めて、行く方遥かに我

世の坂を眺めながら『あゝ妾はもう駄目だ、あゝ妾はもう仕方がない』といふ様な寂しい感想に驅られる人があつたとしたらどうであるか。

けれども其昔自分が毎朝ある處で會ふたといふ其娘は決してそんな曲つた心を持つた人ではなかつた。それはもう若やかな頬の色を見ても、此人が人を恨み世を恨んで、われから暗黒の谷をたどり行く人とはどうしても思はれない。思はれなければ思はれない丈に、彼女の弱點に對する自分の同情は益々深くなつて行くのであつた。それで今自分は枯川兄の話からフト昔の娘の事を思ひ出した『何といふマア可愛らしい乙女であつたろう』。

（三）

何といふ可愛らしい乙女であつたろう。青年が女の事を語る、何、腐敗だと、墮落だと、勿論それはアンマリ好ましい事ではあるまい。そろ〳〵人生の秋にも觸れなんとして居る四十男がマサカ少年と一處になつて花やかな物語も出來まい。苦い顔をして叱りつけるの

が役目でもあろう。けれども君等がいくら苦い顔をして憤慨して見た處で、アノ青年の胸に燃ゆる焰がどうして包み切れよう。自分は其頃青山に親しい友があつて、其友とモウそれは夕ぐれの窓に倚つて心行くまでに女の話をして居た。新聞紙や先輩が苦い顔をすればする程、僕等は反抗的に女の事ばかり話して居た。ああ何といふ樂しい思ひ出の種だろう。けれども今になつてはソレも夢だ。

「僕は君、女の貌はもう極めて平凡なのが好きさ。平凡と云つた處で、何も醜婦を意味するのぢやアないよ。恁う丁度平原の景色を見るようなね、もう初から自分は女だといふような遠慮のない、そうさ勿論其オハチだね、而も其オハチが先天的のオハチで女の優しさが極めて自然にそれを調和して居る樣なのが好いね、」

青山の男はアンマリ自分の說には服しなかつた。何となれば彼は熱心なる美人天才論者であつた。美人と天才とはキツト一致するといふのが彼の持論であつた。僕は此男に屢〻僕の「平凡なる貌」の標本として

跛の娘の事を語してやつた程であつた。

それでも彼女は流石に遠慮がちであつた。彼女は其友に交つてよく笑ひ、よく談じて少しも後れをとる方ではなかつた。けれども彼女の友達が何か人の噂を初めた時、何時か隣りの人の批評を初めた時――年頃の娘が多く集ると恁ういふ場合が多い――彼女はキツト伏眼がちになつて默つてしまつた。あゝあんな無邪氣な娘にもヤツパリ自分の不具だといふ自覺はあるのだな。マア何といふ哀れな事だろうと自分は思つた。そればかりではない時に彼女は非常に沈鬱な顏をして全く別人のやうになつて居る事もあつた。其時にはまた自分の方から恁んな想像をめぐらしたのであつた、「彼女は何か自分の弱點に就て深い〳〵不快を得て來たのではあるまいか」

（四）

或る町はづれの路を彼女は學校の方へ四人の友と一處に歩いて居た。四人の友は「お下げ」「庇」「マガレツト」などの一群で、黃ばんだ小麥畑の上から老いて黑

い青葉の色を望む田園の朝を、若い四人の友は、どんな問題に興じたのか、さも面白そうに笑ひながら思はず其歩調が早くなつた。(女も此時代が一生の花だ)。輿に乘つた一群は其友に一人の不具者のある事を忘れて仕舞つた。可愛そうに跛の娘はだん〳〵遠ざかつて十間ばかりも後からポツポツやつて來る。見るといかにもつらそうにグッタリと頭を下げて歩いて居るのが實に氣の毒だ。自分はもう堪えられなくなつて來た。すると四人の友の一人がフト氣が付いて一同に知らせた。サア此處だ。四人は何といふても未だ「お下げ」や「マガレット」だ。ア丶申譯のない事をしたと思ふと其場を繕ふてやる丈の思ひやりがない。四人はパッタリ立ち止まつたま丶跛の娘の來るのを待つて居る。跛の娘は丁度大道で四人の友から「あなたの足の不自由なのを忘れてオイテケボリにして申譯ありません」といはれたと同じ事に當る。四人の友を待たせて置てそこまで歩いて來る娘の悲しさ、つらさ、情なさ。それは實に思ひやられるではないか。其時の彼女のいたましい姿、

もう僕は之を筆にするに忍びない。――よしそれが數年の以前の事であるにしても。

堺兄がいふた、「どうして慰めてやるか」下手に同情をしてやつても、此四人の友が立ち止まつて彼女を待つて居たようなやり方では反つて彼女を苦しめるのも同じ事である。

自分は此日位彼女の爲に自分の胸をなやました事はなかつた。其日の午後自分は彼女の悲しさを思ひやる爲に、白い「ひめじおん」の花が浮彫のように咲いた、いつもの原の草を籍いて、いろんな感想に耽つたのであつた。

堺兄の話は自分をして遠い昔のこんな記憶を喚び起さしめたのである。それにしても今頃彼女はどんな運命の路をたどつて居る事であろうか。　（完）

△雲湧けば、水立ちさわぐさま見えて、湖行く舟のゆれもこそせれ。

△欸乃の遠くひゞきて、一葉舟の、雲わけ行くか諏訪のみづ海。

（諏訪湖畔にて小野生）

婦人は何故に不淨なるか

附　處女の眞意義

中尾清太郎

婦人は何故に不淨なるか。こは余に於いて久しき間の疑問なりき。而して斯かる疑問は、寧ろ冷かに歴史的に攻究するを以つて、最も解決し易き方法となす也。余今試みに之を論ずべし。

我邦中世以後、婦人は所謂靈山に登ることを許されず。何故かと問へば、不淨なればなりといふ。斯くの如き理由無き掟は、先づ高野山を始とし、比叡山、日光山、富士山、立山、其他名ある山々多く之を守らざるは無し。然も是等の山々は皆宗教家の目的に於いて、參拜の對象と命じ居る所なれば、女人なりとて絕對に拒むべくもあらず、緩和姑息の手段として思ひ付きたるは女人堂にぞある。即ちそれらの山々の中腹には、いづれも女人堂といふもの丶設備ありて、婦人は老幼に拘らず、こ丶より上に登るは禁制なりとて追ひ返さる丶を常と定めらる。されば此禁制を破りて、敢て登山するが如きものあらば、山靈は忽ち震怒し、瞬く間に天地を晦冥ならしめ、風伯雨師を使ひて、一山鳴動の裡に、人間を殺傷せずんば已まざるべしと說く。殊に怪しきは、設令女人堂まで到るとするも、若し其婦人にして、月經期に瀕するものあらば、矢張同樣の災害あるを期せざるべからずと信せらる丶一事なり。（こは余の論の進行に伴ひ、自ら明かにせらるべきすぢに屬す。）

而して余思惟するに、此俗、獨り我邦のみに限らざるべし。佛敎の行はる丶東洋地方、就中印度、西藏、支那等にも必ずや之に類似の迷信習俗あらむ。蓋し此俗や、全く佛敎の婦人觀より由來せしものと考へらるべければ也。既に我邦の實地に就きて之をみるも、女人禁制の山々は、すべて佛敎の本山所在地、若しくは佛敎所緣の或本尊を奉置せる所なるを指摘すべきにあらずや。

尤も佛敎の發源地印度にても、佛敎弘布以前、即ち

大好評毎號賣切れ再版三版眞價を知るべし

日本第一

婦人世界

に實用專一

八月三日發行 毎月一回 第八號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九拾錢 一年分一圓七拾五錢

口繪

◎山階宮妃殿下の最近御寫眞◎
◎名家の新婚寫眞（珍品三組）◎
◎三宅花圃女史の家庭と其書齋◎
◎蒙古女學生の書と河原女史◎
◎社交倶樂部の婦人喫茶會員◎

彩色石版 夏の朝……中澤弘光
雁來紅……跡見花蹊
繪本手 瀧……中澤弘光

婦人の日常生活法

村井弦齋

▲何の運動が婦人に適するか
▲散歩は如何にすべきか
▲精神の運動は如何にすべきか
▲足の運動は如何にすべきか
▲手の運動は如何にすべきか
▲接客は如何にすべきか
▲交際は如何にすべきか
▲言語は如何に遣ふべきか
▲笑ひ方は如何にすべきか
▲訪問は如何にすべきか
▲土産物は如何にすべきか
▲お八つは如何にすべきか
▲氷は如何に使ふべきか

見よ 日本婦人必讀の大文字を これを讀まぬ人は大不幸なり

◎弦齋夫人の料理談

△冷し珈琲は如何にして造るか
△氷箱は如何に使ふか
△レモナードは如何にして造るか
△桃は如何に料理するか
△玉子の淡雪とは何か
△唐茄子は如何に料理するか
△赤茄子は如何に料理するか
△イチボ肉は如何に使ふべきか

◉小兒汗もの豫防及治療法……ドクトル加藤照麿

◉暑中休暇と子供……大村仁太郎
◉夏の我家……有島幸子
◉家庭用ラムチ製造器……鶴田博士
◉アイスクリイム製法……嘉悅孝子
◉海水浴と温泉……醫學士伊庭秀榮
◉上海までの船中日記……河原操子
◉三宅花圃女史の面影……樂石生
◉買物案内……近藤蕉雨
◉妊娠中の心得……產婆西尾京子
◉婦人と寫眞……石塚月亭
◉天人菊（小說）……河井酔華
◉暑中休暇と子供……後閑菊野

發兌元 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參弐六番） 賣捌 全國各地書店

エタ時代にありては、却つて然らざるものありて、毫も婦人を不浄視するが如き不自然なる傾向ありしこと無く、唯天地の生々化育を楽み、悠々自適するを人生の目的とする底の、極めて楽天的、極めて無邪氣なる國民たりしを見るのみ。（此一段、余、詳論せず。幸に堺君が曾て「二十世紀婦人」「平民新聞」等に譯載せられし「性慾論」中、エタ讃誦の一節あれば、參考とすべし。曰はく――）

本來の母の子宮を準備せむ爲には、ヰシユマの神に祈れ。

精液の流入を守護せむ爲には、プラヤパチの神に祈れ。

卵子の生育の爲には、他の諸神に祈れ。云々。

斯くの如き天眞純潔なる國民が、爭で婦人を不浄視すべき道理あらむや。之にて憶ひ出ださるゝは、我邦にても、「古事記」日本武尊の紀事中に、尊が尾張の宮簀比賣の家に入りし時、比賣御酒盞を献げてもてなすに當り、襲衣の裾に月經着きたるを見る。是に於いて、

尊は此月經を即席の題として歌うたひ、比賣亦之に和して答へたる一節あり。

尊の歌（要略）

覓かむとすれど、さ寝むと思へど、汝が着せる襲衣の裾につき經ちにけり。

媛の歌（〃）

宜なく〳〵。君待ち難に、我が着せる襲衣の裾につき經たなむよ。

平氣に月經云々のことをいひて怪しまず。之によりて歌まで作り出でむとは、僞善虚飾に滿たさるゝ後の世の思ひも寄らざる所ならずや。

また西洋にても、基督教以前の猶太教にては、此事あるを以つて、左程羞耻とも感ぜざりしが如し。されば利未記を見ても、申命記を見ても、屢々男女間の秘事を語り出づるに、洵に臆面も無かりしものあり。唯不浄といへば、女子の月經に限らず、男子の精液をも不浄としたりしが如し。而してそれらに關する記事は、舊約聖書中到る處に散見して、殆ど應接に遑あらざる

姿なり。故に余は好んで之を援くの煩を取らざるべし。

されば我邦にても、印度にても、又西洋にても、婦人を不淨視するが如きは、上古純朴の民の決して思惟せざりし所なるのみならず、彼等は月經精液のことまで語りて穢しとせざりし也。あゝ是れ寧ろ人間の自然の表白にあらざるか。唯之を穢しと見るに至りしは、偏に佛敎の感化――肉體は煩惱の根機にして解脫の障礙なりと戒めたる波羅門傳來の敎義に基づくものにして、特に婦人に對する不淨觀も此敎義に養ひ立てられて、愈々長じたるものと謂はざるべからず。

さて別に、佛敎が斯く婦人を不淨視するに至りし根本原因は、余の考に據れば、たゞ其月經に在ることを斷言せむと欲する也、是れ男子の精液と異なり、如何なる禁欲主義の善女人比丘尼と雖も、或一定の年齡に達するまでは免るべからざる生理的經過なればなり。佛敎は之有るが故に、女人を不淨なりとせしのみ。この單一なる原因は、後に至りて種々なる弊害を生み落したり。女人は罪障深きもの也といふも、到底救はれ

ざるもの也といふも、又三界に家なしといはるゝも、皆こゝに胚胎する也。其他佛敎國に於ける男尊女卑の惡風も、其原因を詮すれば、遠くこゝに由來せざるは無けむ。恰もウパニシャド時代の、天を以ッて快樂國となし、地を以ッて多苦の世界となしゝ神話的一想像が、遂に大厭世敎を形りしが如く、佛の時代の婦人不淨觀も次第に發達して、遂に後世の婦人に對する諸種の悲觀をも生せしめたりと謂ふべし。即ち最初全く生理的智識の缺乏より起りし不淨觀が、後日に至りて全く宗敎的戒律の意義を取るまでに變遷せしを見る也

斯く婦人に對する不淨觀の發達すると同時に、一方に於いて、不淨ならざる婦人、即ち處女を尊ぶ、風をして、甚しく助長せしむるに至れり。元來處女を尊しとし、聖しとする習慣は、國の東西に論なく、殆ど歷史といふもの有ッてより夙に看出さるゝ事實にして、トロイ國にて海神ポセイドンに處女を供せしが如き、我邦にてヤタノヲロチに處女を獻せしが如き、既に處女を聖しとせし風ありしを證するに足らずや。其他我

邦垂仁以後齋宮の皇女の、多く處女なりしに見ても、後世神社に奉仕する巫女の處女なるに見ても、之を聖しと認めたる風習は餘程古きものあるを想ふべし。更に其神秘を信せむとしたる例には、基督の母マリヤあり、彼女は處女にして妊めり、又所謂オルレアンの處女あり。彼女は不思議なる働を爲したる女性なりき。シャルロッテ、コルデエもいと弱き處女なりき。

讀者よ。余は今不用意に處女の語を繰返したるが、この語に就きては、恐らく議論の紛糾するものあらむ。余は其意義を定むる爲、更に少しく言を費さゞるべからず。

抑々處女とは何ぞや。世俗に從へば、凡そ二種の意義あるが如し。

一は未だ男子と接せざるもの。

二は未だ月經を見ざるもの。

前者は既に月經ありとするも、若しくは月經の有無に關せず、未だ男子と相見ざるものなれば、女子自身は神聖なりとする考にして、却ッて男子の惡露を嫌ふものとなる也。(醫語に所謂處女膜ある由來を考ふべし。)後者は健體の女子、未だ月經を見ずして可なるべき年齡を限りていふなれば、女子を或期間だけ神聖なりとする考にして、つまりは女子自身の月經を嫌ふものとなる也。(但し病的にして、月經遲れたるもの、若しくは其閉止期に際したるものは勿論算入せず。)而して其正當なる意義は、いづれに在りとするも、之を尊しとし、聖しとする思想は、共通なるが如し。

それと同時に、斯く二樣に考へられたる根本動機も、矢張佛敎の不淨觀より來たりしものなるは確實なりと謂ふべし。唯第一の場合に就いて、余が前文之を説明するに充分なる叙述なかりしを危めば、玆にそを補ふべく、左の一小話を以ッてせむ。

摩鄧といへる者の娘、佛弟子阿難の容色を見て、彼が妻とならむと欲し、佛に到る。佛言はく、汝は阿難の何を愛するや。娘曰はく、われ阿難の眼を愛す、阿難の鼻を愛す、阿難の口を愛す、阿難の耳を愛す、阿難の聲を愛す、阿難の歩を愛す。佛言はく、

眼中には唯涙あり、鼻中には唯涕あり、口中には唯唾あり、耳中には唯垢あり、身中には唯屎尿諸種の臭不淨あるのみ。夫婦有らば惡露あり。惡露より子を生ず。已に子あらば死あり。死せば便ち哭泣す。此身中に於いて何の益する所あるか。娘即ち身中の惡露を思念して、自ら心を正しくし、羅漢を得たり。云々。佛教聖典、一二七頁。

斯くの如く男子身中の惡露を念ふが故に、之と交はりたる婦人は、即ち不淨視せらるゝ也。要するに世俗の處女解は、第一、第二、共に佛教の迷信より由來すと謂ふべし。

而して其處女解を誤れることは、猶不淨觀の誤れるが如き也。余は依つて其眞解釋を揚言せざるべからず。

先づ余が不淨觀は、月經云々に關せず。又未婚と有夫とに關せず。婦人にして勿論男子を數ふるも可なれども、そは問題外なれば姑く擱く。苟も不貞姦淫の事を思念する時んば、これ即ち汚されたる也。基督の所謂凡そ女を見て色情を起こす者は、衷心既に姦淫せる也とあるは、固より其目的格を男子にも改め得べきのみ。是れ豈に幼稚卑近なる不淨觀より脱出して、高尙深遠なるそれに赴くものにあらずや。

次に余が處女解は、極めて精神的なり。男一人と女一人とが心相許したる時には、既に結合ありと謂ふべし。それと同時に三々九度の形式ばかりの婚禮を擧ぐるも、其心にして一致せず、其愛にして一體とならずば、勿論眞正の夫婦にてはなかるべく、且つや餘儀なくせられたる一方は、未だ汚されたるにあらずして、以前の處女たる資格を繼續せるものと認むる也。（されば、凌辱を受けたる場合の如き、婦人の貞操は汚されざる也。）故に余の處女解は月經の有無に關せず、婚未婚に關せず、或は成立し、或は成立せざる場合ありと知るべし。要は深く精神的に解するに在りとす。

然るに、東洋の佛教國にては、婚姻に於いて、單に初婚を喜ぶ風あるは、男子の嫉妬に基づくこと最大原因なりと雖も、亦一には此佛教の馴致したる不淨觀に化せられたるものあるを想はずんばあらず。隨ッて無暗に再婚を非とする貞女道も男子先夫後夫ともの嫉妬以外、其一隅に此迷信潛めるを知るべき也。今日印度にて、政府が如何に年若き寡婦の再婚を奬勵しつゝありと雖も、尙容易に行はれ難きものあるは愈々佛教國の特產なることを示して餘あるにあらずや。

菜食實行法

大石祿亭生

△菜食主義を學理的に研究する事は、姑らく加藤君の菜食論に任して置き、余は其實行的方面に就ての考を少しく茲に述べて見やう。

△西洋で菜食料理の材料に用ゐらるゝものは、穀類菓實蔬菜の外に、卵オレヴ油乳汁及び乳汁より得たるクリーム、バタ、チースなどであるが、我國では未だ野菜と菓物の種類が多からず、其性質もあまり上等でなく、特に牛乳や卵やオレヴ油は比較的高價なるもので之れを一般人民の食料にすると言ふ事は甚困難である。而のみならず西洋の菜食調理法は概ね複雜極まつたもので、日本の如き簡單なる設備の庖厨に應用するは至極六ケしい事である。

△或人は「簡易生活の研究を爲すに日本が一番適當な所である」と言つたが、余は菜食主義の實行を爲すに當つても、之を西洋人に學ぶより先づ日本固有の料理法を考へて見るがよいと思ふ。何となれば我國で中等

以下大多數のものは、皆昔から菜食主義を實行して健康を保つて來た人間である故、若しも之を徐々に改良して行くならば、最も我國に適當な菜食料理が自ら出來るであらう。

△余はこれまで西洋の菜食料理法につき多少の研究と實驗を試みたものであるが、之を其まゝ我國に輸入せんとするは、そのあまりに複雜であり又不經濟である爲其不適當なるを斷言せざるを得ぬ。而かも之を其營養分と日本人の嗜好とに稽へて見れば左程手數と入費を要したゞけの價値がないのである。

△例へばソースに就て考へて見ても、洋食では概して其製法が面倒である。特に其種類はと言へば實に數限りなき程あつて、各種の料理にそれ〴〵特別のソースが必要である。さうして其折々に之を拵へると言ふ事は甚煩はしく、醬油の一品を以て總ての物へ味をつける我國の料理法の簡便な事とは甚しい相違である。

△余も一時は洋食の迷信に陷つた時代があつて、野蠻と言ふものは醬油臭いものであると思ふた事もある。

併しよく考へて見ると此醤油ほど單一にして多くの物に調和し、之に濃厚な味を與へるものは外にない。煮しめでも吸物でも燒肴でも酢の物でも、其他殆んど總ての料理に用ゐて是ほど美妙なる味を着けるものが、又と他に發見し得らるゝであらうか。

△西洋の料理法で肉類を一切用ゐぬ事とすれば、野菜物へ味をつける事が甚だ六ケしい。そこで自然とバタやクリームの樣なものを澤山使用するの必要が起る。所が日本には醤油と言ふ都合の良いものがあつて、強ち肉の味を借らずとも、バタやクリームの助に賴らずとも、之によつて濃厚な味を出す事が出來る。さうして此醤油の性質を調べて見ると、蛋白質に富む豆と麥から成立したもので、之を焦した爲に香ばしきカラメルも出來、又中にはエキス分も糖分も含まれてあるので、單に其味を賞するに止まらず、其滋養分に於ても貴重なるソースとして存在せしむべき價がある。

△今後バタやチースやオレヴ油が日本で澤山出來る樣になれば之を用ゆるのもよいが、左もない限り西洋の

菜食料理を眞似る爲、高き價を拂ふて是等の原料を態々輸入するにも及ぶまい。日本固有の食料には蛋白質と脂肪性のものが不足であると言ふは、幾分か根據を有する非難ではあるが、これとても材料の選擇と調理法に氣をつければ、適當の營養分を採集し得られぬ事は無い。例へば蛋白質は豆類から作る豆腐だとか味噌だとか言ふものに大分含まれてあり、脂肪は胡麻や綿種から採る揚げ油から可なりの供給をうける事が出來る、又昆布や若和布の樣な海草も他の食品によき味を着けるもので、多少の滋養分をも含んで居るから、是も亦菜食料理の材料として注目すべきものである。尙今後我國の園藝と農業が發達するに從ひ、菜食料理の原料となるものが益々增加して來る事と信ぜられる。

△要するに菜食主義の實行と言ふ事は急激の變革によつて出來るものでなく、どうしても漸進的に之を行ふべきものである。故に精進料理に於て鰹節を排斥すると言ふ樣な、感情に偏した事を俄かに行ふの必要もあるまい。但だ先づ獸肉鳥肉魚肉と言ふ樣な順序に漸次

其使用を節減し、次いで之を全廢するの法を取つたらよからうと思ふ。

△左らば現下菜食主義に志すものが選ぶべき食物の種類と調理法は如何。これは前にも述べた通り日本に固有の穀菜類を、在來の調理法によつて用ふる事から始めればよいのである。則ち多くの野菜料理中にて比較的に滋養と美味の性を備へたものを選擇するにある。その手近い例を取つて言へば、味噌汁と言ひ、けんちんと言ひ、水飩と言ひ、豆腐の田樂と言ふが如き物は、皆菜食主義の料理として其儘に存在するの價があると思ふ。尚西洋の菜食料理からもポテト、コロケやビーン、スープや野菜サラダの如く簡便なるものを選び、之に加ふるに和洋折衷の菜食料理をも發明したら良からう。

△余が之に就き汎く讀者に望みたきは、諸君が日常の献立と地方固有の料理中より、理想的菜食料理に近きものありと思はゞ、勉めて本誌によつて公けにせられん事である。尚西洋の菜食料理中便利にして我國に應用し得べきものや折衷料理の發明につき、余は讀者諸君と共に之が研究を怠らぬであらう。

同病相憐の記（中）

有隣生

英雄は英雄を知るとやら。されば病人の心事は病人が最よく知つて居ると言はねばならぬ。健康な人が「一年有半」を讀んで兆民居士の言論を批評しやうとするのは間違つて居る。無神無靈魂説に就て如何だの、死にかけて社會人事を罵倒したのは穩健で無いの、此著が斷片零碎的で、有名なる居士の遺著としては少く物足らぬ心地がするの、と言ふやうな人達があれば、夫れは餘りに人情が無さ過ぎる。吾人はたゞ「一年有半」起稿の動機と執筆中の境遇に向つて、深厚なる同情を寄せて始終涙を以て讀むのである。居士曰く「一年有半、諸君は短促なりと曰はん、余は極て悠久なりと曰ふ。」五十年でも百年でも死後の無限に比すれば短促である。否始より長短の比較にはならぬ、寧ろ無であるが、若し何等かの爲す所有りて徐かに生を樂むに於ては、一年半是れ實に悠久では無いか。余に取つては壽

命の豐年と言はねばならぬと。居士は斯の如く炳然たる道理を語られた。けれども不治と決つた病氣で醫者から告げられた一年半、夫れが時々刻々に迫つて來るのではないか。明日をも知れぬ生命でも先が知れ無ければこそ樂んで暮らせるのである。それを一年半、十八ヶ月、五百餘日、と斯う限られ刻まれた期間が、道理ではあろう、哲學的ではあろうが、何んで悠久と言はれやう。僕の耳には居士の此の言が、生來初めての大なる感慨に擊たれた絕望の聲と聞こえて、實に同情に堪へぬのである。識者或は僕の餘りに女々しく愚痴つぽき同情を見て、是れ居士の本領を知らず、居士の意氣を傷けるものなりとして、僕を嗤はるゝかも知れぬ。併し僕は何と言はれてもよい。玆には理を說くのでは無くて、情を語るのである。他日地下で居士に出くわして叱責を受けても、固より甘受する積りである。而て僕は繰り返へして言ふ。醫者から一年半より持たぬと告げられた時には、流石の居士も如何に失望されたろうか。一年半を悠久であると言はれた裏面には、如何に悲しき感慨が波打つたであろうか。愛兒の行く末などを思つては、如何に哲學者らしからぬ愚痴をこぼされたろうかと。

年齢は中江氏より若くて、病苦の期間の頗る永かりしは正岡子規氏である。俳界刷新の功や、其作品の品隲は僕の知る處で無い。僕はたゞ永い病床に於て如何に苦しまれたかに就いて同情を表したいのである。その「病床六尺」や「墨汁一滴」に於てチョイ〱病苦を訴へられた處を見ると、黯然銷魂するを禁じ得無い。中にも堪まら無い節を擧げて見ると、彼れが身體の自由を失つて五年の間、纔かに筆を執つて思ふ事を書くことだけの出來るのを、非常の天惠の如く感じて居つたのに夫れ丈の自由すら遂には奪はれそうになつて來た。そこで彼れは、馬琴が失明の後、草稿を書くにいたく困難された事を述べてある一節を見て「此文昔は只餘所のあはれとのみ見しが今は一々身にしみて我上の事となり了りぬ。されど馬琴は年老い、功成り今正に八犬傳の完結を急ぎつゝあるなり。我身の未だ發端をも

書き敢えず、早く既に大團圓に近づかんとすると固より同日に論ずべくもあらず」と。彼れは如何に人の成功を羨んだであろうか。彼れは如何に自己の運命に泣いたであろうか。而て病める彼れは亦如何に他の不具者の境遇に同情したであろうか。彼れが永き病苦の境涯中には同情すべき點が澤山あるが、健康者に取つてはチョイと氣の付かぬやうな事でも僕の心を動かした事がある。ソレは彼れが看護人の手を借らずに苦痛を忍んで體を横たへる工夫をして、疊の表に麻を以て、簞笥の環のやうなものを拵へて、之れに縋つて寢返りをしてゐたといふことである。僕は之を見て其病苦の一方ならぬを思ひ、自分も假に其型を作つて見て、彼れの病境の如何ばかり不自由であるかを想像した事がある。

彼れは意志の剛健な人で、非凡なる精力を有して居つたに違ひ無い。彼れは又徒らに死を恐れる者では無かつた。けれども他の健康を羨み、長壽を羨み、鳥の飛ぶのを見ても蟻の這ふのを見ても、我身の動け無いのを嘲ち、愚痴もこぼし、而して泣きもした點に於ては決して常人に劣るものでは無かつたのである。

近藤氏は如何。「仰臥三年」を讀んで直に思ひ浮むのは、彼れの境遇の頗る寂寥であつた事である。彼れは正岡氏の如く友人門弟等の集まり來つて慰むるものが無かつた。中江氏の如く夫人と倶に風光を賞したり、好きな義大夫を聞いたりする自由を得無かつた。病院の重病患者室の無趣味極まる一隅に、仰臥のまゝで三ケ年も暮らして居つたのである。彼れは醫學士であつて、醫術を修めた智識が有る丈に、自己の痼疾の癒らぬ事を疾くから知つて居つた。難病なる事を知り抜いて居る丈に其失望の度も深かつたろう。癒らぬシカシまだ容易に死なぬ。今後何年間かは病苦の境涯に居らねばならぬ事を自覺して居つた丈に、其痛恨も一通りでは無かつたろう。友人たり同僚たる醫者達の施術にも、彼れは左程に頼みを置か無かつた。故に彼れは醫者に向つて、物質的治療以上に精神的治療を望んで止まなんだ。けれども周圍は到底彼れの渴望を滿足させる事

が出來なかつたので、遂に現今醫界の弊風、醫者の無能薄情を叫び出した。自巳の運命に安んじて他に何等不平の言無く泰然として死せし彼れが、醫者に向つてのみ罵りつゝあつた心事を忖ると、實に斷腸の思ひに堪へぬ。噫彼れにして病無くば、彼れの病にして癒えしならば、彼れは思ふさま其理想を實行したであろう。實行したかつたであろう。彼れが醫界の弊風を攻擊しつゝ死んだのは、實に終天の恨事と思ふ。

夫れから病苦と鬪つた歲月は、正岡氏の八年（身體の自由を失ふてからでも五年）、近藤氏の五年（仰臥のまま動け無くなつてからでも三年）、中江氏の一年半、といふ順序で、正岡氏が最も永かつた。年齡は中江氏が五十餘歲で、正岡氏近藤氏略々同年の三十六歲？、これは中江氏が最長壽であつた。而して僕をして姑く三氏の病境に就て想像を逞うせしめよ。中江氏の周邊に來る者は少數の門人の外多くは離合常無き政友などで、眞に枕頭に、熱情を以て看護した者は尠なかつたろうが、風光好適なる處に靜養して、自由に妻女の介抱を

受けて居られたのは、大なる慰籍であつたろう。近藤氏は最後の三年間は一歩も病院を出る事が出來ず、友人の醫者達が治療に骨を折つて呉れた割合には外部よりの慰は尠なかつたであろう。此點に於ては正岡氏が一番幸福であつたらしい。が試みに思へ、短きも一年半、永きは八年の間、身體の活動を停止せられ、イヤ活動どころか、甚きに至つては、僅に身體を左右する事すら激痛に妨げられて、さながら釘付けの姿で、單調なる一室に居るのだから、普通の人ならば三日か五日の辛抱も出來るものではないのだ。そらに病氣は癒る見込が絕えて、たゞ死期を待つばかり。人世斯の如き不幸、何を以てか譬へられやう。而かもよく之れに堪えて、病苦に打ち勝ち、斯る惡境を善化するに努められたのは、世の健康者が多年奮鬪して至難なる大事業を成就したのと、其氣力精力に於て優劣は無い。

其他三氏とも不遇であつた事や、何等宗教上の信仰を有して居なかつた事やは、頗る酷似して居る。若し夫れ修養の厚薄や著書の內容の論評に至つては、僕逆

も試みる勇氣が無い。たゞ其病境に同情して、更に吾人に與へられたる教訓に感謝するのみである。

死生の問題などは諦めて仕舞へばよいと一言にいふのは、マダ本當に此問題に逢着しない人の氣取つた云ひ草である。コンナ衒氣のある事を言つて居る人が、往々マサカの時に、未練らしい見苦しい擧動をするものだ。死ぬべき運命を持つた慢性不治の病人が、たゞ死をあきらめたとて、夫れで病境に安住して居らるゝのではない。必ずソレ以上の工夫が無くてはならぬ。天命を樂むといふ域に入らねば、一日でも生きて居る甲斐が無いと思ふ。

三氏が多年病苦と闘つて、悲みの中、苦みの中、愚痴をこぼす中にも、確固たる信念をもつて居られたのは事實で、この信念は即ち死生の問題を實地に解決して得られたのだから、少も嘘で無い僞で無い。活きたる教訓を吾人に示されたのである。其悟入の方法に至つては、各人各樣であるけれども、要するに、人間は身體と精神との二方面で成り立つて居る。その身體の病

氣は人間の一方面だけの病氣であつて、人間全部の病氣では無い。一面には精神の健在して居る事を忘れてはならぬ。故に身體の病氣は身體だけの病氣として置いて、一面には精神を活動せしめねばならぬ、といふにある。中江氏は曰く「疾病の一年半は追々歩を進めたる如し。彼れは徐ろに彼れの寸法を以て進めり。故に余も亦余の寸法を以て徐ろに進まん。一の一年半は疾也。余に非ざる也。他の一年半は是れ余也」と。近藤氏は病的生活と健的生活の二つに分ちて曰く「病的生活は之を病的生活として健的生活より差別せざる可らず。尤も病的生活に居るとも、我が生を愛することはなほ健的生活の人と異らずして、醫藥を廢せずと雖ども、もはや生を貪るの痴戯を演ぜざる也。死生の出入往來と病勢の進退弛張とは、我に於て何かあらん」と。正岡氏が病苦の最も險惡なる時「自分は昨日以來晝夜の別無く、五體すきなしといふ拷問を受けた。誠に話しにならぬ苦しさである」と言ひつゝも、よく平和の生活を續けられたのはツマリ身體の病苦と

精神とを別にして居からである。身體と精神との關係に就ては專門家の深遠なる說もあらうが、現に三氏によりて、斯の如き興味ある實地の敎訓を示されて居る。身體的症狀は醫者に往け、精神的症狀は宗敎に往け、とは吾人の常に聞く處。而かも慢性不治の難病になつては如何するのであるか。宗敎を信じ得無いものは如何するのであるか。不治の難病が世にある以上は、醫術の進歩は極點まではマダ大分遠いのであらうか。信仰を有する人は幸である。特に熱烈なる迷信者は妙である。けれども不信者はコンナ話を聽くだけでは、迚も人世の一大事たる死、理に於ては諦らめ易く情に於ては忍び難き死、の前に泰然としては居られぬ。然るに三氏によつて吾人は大分に明るくなつた。其初めに當つては、一たびは狼狽もし、驚愕もし、絕望もし、悲嘆もして、其薄倖に悶えられたろうと想像せられるにも係はらず、聰明なる氏等は、いつまでも其愚を演じては居無かつた。やがて其病氣の到底助からぬことを覺つて、玆に大決心を以て精神を活す事にした。ソシテ身體の病氣の趨向と精神上の調和をとつて、永き

病苦と勇戰して、不平や、愚痴や、悲哀や、痛恨やを壓え付けて、平和に大往生を遂げられたのは、實に大なる敎訓として、感謝せねばならぬ。

さればとて、世間幾多の病人は必ずしも事情境遇を同じくしては居らぬ。隨て何人も三氏と同じやうに遣れぬは無論であるが、しかし、何人にも共通の事實はある。ソレは病苦は人世の一大災厄で、自己一身に止まらず家內全躰を不幸に陷らしむる事。生産力を奪はるゝと共に非常の費用を要し財力の缺乏を來たす事。社交と遠ざかる爲に周圍の寂寞を感ずる事。精神上に總影響を及ぼし、人生問題に想到して煩悶する事。等である。故に僕は病苦に惱んで愚痴になつた人を尤めようとはせぬ。尤めるどころでは無い、人世第一の慘禍に罹つた薄倖者として、有らん限りの同情を吝まないのである。然れども思へ、もがいたとて嘆いたとて、愚痴をこぼしたとて、運命を左右する事は出來ぬ。却つて益々病苦が募るばかりだ。然らば病境に善く處するを以て最良なる方法と覺悟せよ。三氏に學べ。而て最にそれ／＼工夫する處あれと勸めねばならぬ。

菜食論（二）

加藤時次郎

▲菜食主義の歴史

菜食主義の歴史は、教育上の意見と特別なる生活の觀念とに因つて起つたもので、精神的道德の成熟發達せる第十九世紀前の遺物として今日まで存在して居るのである。

菜食主義の淵源の古いことは、人類の起原と其軌を一にし、人生が歴史を有すると共に、此の問題も亦其歴史を有して居るのである。菜食家は最も古き人類の手蹟の如きものにも非常なる熱心を以て注目し、以て古文書類を探り、あらゆる時代に於ける民族の生活に就て研究材料を蒐集し、其材料中、若し菜食家の觀る處と意見を異にする者あるを認める時は其氏名を擧げて菜食主義に於ける文學材料と爲すのである。而して之が研究の嚆矢となせるは、デ、グライゼス氏の著『グリチア』で、此書は菜食文學の根底的著作として今日

なほ賞讚を博しつゝあるものである。尙ほ此外、史界に於ける歴史上の人物に就て觀るも、菜食主義に關する著述は決して乏しくはなかつたであらうが、秘密の裡に葬り去られて世に現はれなかつた者も亦少くはない。今、是等の著述家として今日其名の知られた者を擧ぐれば左の如くである。

ブラーマー、　ザラツースラ、
ブツデイア、　モハメツト、
ヘジオツド、　ホーメル、
ヘラキツト、　デモクリツト、
アリスチーデス、　エパミノンダス、
ピタゴラス、　ソクラテス、
プラトー、　テイオゲ子ス、
フエーノー、　エピクル、
ヌーマーホンピリユース、

右の外此主義に最も熱心なりしは

カトー、　プランツス、
ヴイルギル、　オヴイツド、

ゼヂカ、　アポロニユース、
プルタルと、　ポルフイリユース、
等の諸氏で、爾來長日月を閲して後、中古に至り、大著述家として名ありしは左の諸氏である。

ミトン、　ポスエツト、
フェヂロン、　ライプニック、
モンテスキュー、

猶降つて近世に至れば

ヴォルタリエ、　ジヤンタツキーユ
ルーソー、　ベンジヤミン、フランクリン
クピエ、　ラマルチテ、
バイロン、　シェレー、
ニュートン、

等の諸氏がある。（右のうちなるニユートンは第十七世紀中に生活せる人にして、彼の菜食家を以て有名なるイサツク、ニユートンとは同名異人なり。）以上列擧せるは皆是れ人生を精神的文明に導きたる人々と謂ふべきである。

グライゼス氏が此主義の開發に盡粋したる一人であることは疑ないけれど、彼の論理式は世の俚諺又は豫言の如き意味を有し、恰も昔譚の歴史を想起せしむるやうなもので、やゝ兒戯に類する點がある。而も猶は他の菜食家の菜食論に比すれば、此の缺點あるの故を以て之を第二位に置く事は出來ないのである。

菜食家として著名の人物に屈指せらるゝ者は、其初め、動物を殺すの状を目撃して、以て惻隠の情を起したのか、若くは精神的に、蔬菜食をも肉類の如く美味なるものと考へて味つたのか、或は何等かの原因によつて一時肉食を廢するか、永久に之を禁ずるか、せねばならぬ場合を生じた爲め、漸次禁肉に就て研究し、而して其研究せる問題に對しておのづから深き趣味を添へ來つて、遂に純菜食家と爲れるか、に外ならぬのである。

此の歴史より以前に菜食家無しとすれば、此主義を發達せしめた始めの人はアヒルレウス氏にして、神學者なるヲルフエウス氏及びヒポリトス氏は之に次ぐも

のである。

菜食家中頗る神聖なるものはピタゴラス氏である。氏自らには菜食主義に關する著述は無かつたが、よく此の主義の唱導に努め、世の疑點に對しては、常に正確なる講演を以て之れを闡明ならしめた。故に後代に至り、この門生中よりして當時の諸學者に先ちて、先づ此の主義の書を著したるプルタルヒを出し、又生活學の原理に就て書を著したるポルヒリュースを出した。是等諸氏の輩出したるは、一にピタゴラス氏が此の主義を唱導したる結果と謂ふ可きである。

菜食主義の根源を希臘式にとり、純粋に植物性の滋養法を主張したるピタゴラス氏の菜食法は、久しく世人の狐疑を免れなかつた。中にも彼のピザ大學の博士アントニオ、ホッヒー氏の如きは、最も綿密に熟考して常に此の主義の擴張に努めてゐたが、總ての菜食家が之を以て滋養と爲すことの原因には疑を挾んでゐた。氏の著書は精神的に此の疑點を説明して詳細をきはめてゐる。其の一節に曰く、

昔日の著書は皆ピタゴラス氏が爲したる食物の實驗を學んで之を他に及ぼせるものに過ぎざるが故に、自身の實驗と考慮とに就ては何等の加ふる所も無いのである。世人は鳥羊小牛其の他の哺乳動物、魚類、を食した時の如く、豆、野菜等を食するにも、亦何等の考をも懷抱しなかつたのである。而して彼等は健康に害ありとして、魚肉や動物の大部分の内臓等を食することを禁じて居た。若し人がピタゴラス氏の觀察に反對して、後世の實驗家の説に從ひ、固く乾燥したる總ての蔬菜を除き、柔き新鮮なる野菜を健全なる動物の營養物として攝取する時は、假令少量なりとも酒精の如きは全く之に反對せればならぬのである。又ピタゴラス式の多數の書籍に就て注意と實驗とを以て調べたならば、大なる哲學上の智識を得、而して其の實驗の上に於ては、疾病の豫防を爲さんがために、營養の過度、精神の過勞、及び五官の衰弱を保護するの要あるを知るであらう。

其の他猶一歩を進めしコッヒ氏の法にては、豆類を食することをも禁じた。これは想像的の事で、到底菜食主義の原理なる生理法たるには堪へないのみならず、また甚しく不合理である。コッヒ氏の式は畢竟想像を根據としたものであるが、今日もなほ或國民中には此の理想を畫き、植物を崇拜する上より、迷信的に豆を食せざる者もある。此の豆を食するを禁ずるは、ピタゴラス氏の行ひたる菜食主義にはあらず、これに附屬し

て起つたもので、同氏に對する一種の敬意を以て爲したのであることは明かである。

肉食嚴禁は、人生を知る者の實驗上の精確なる原理、即ち動物に於ける精靈的變態を見て、埃及時代に肉食營養の禁制を行ひしより始まつた一の敎法である。然しながらコッヒ氏の說に從へば、此敎法はピタゴラス氏の肉食禁制の辯護論であると云ふ。此の法は、各宗敎哲學及び各道德的倫理學に趣味を添へる所の神敎であつて、ピタゴラス氏式の生活法に於て菜食法の種子を播下したものである。各哲學者及び歷史研究者はピタゴラス氏を稱して、「彼は啻に科學の研究者、哲學者、政治家たりしのみならず、總ての宗敎的統御の祖先として憬仰すべき人物であつたことは疑ない」と言つて居る。蓋し吾人が古代の生活法の標本は同氏より得たる所多きを以てゞある。

ピタゴラス氏の生活法は現今トルストイ氏が實行しつゝある、單純にして而も善良なる敎であつて、今を去る下年の昔に率先したる法式である。ピタゴラス氏

と意見を同じうする哲學者等は、若し人類の營養が單純なる物質を以て得らるゝならば、自己は固より、之を他に對つても遂行せしむることを當然の事と信ずるのである。而して此の單純なる生活法は、あらゆる强迫を去り最も美に、最も清淨なる調理法によつて、その口腹を悅ばし、心思に滿足を與へ得る人々によつて行はれるのである。

ピタゴラス氏は總ての動物を神聖なるものと爲し、少しも動物を撲殺することをなさず、特に動物を價値あるものとして、是が虐待を禁じ、延いて動物犧牲の上にまで及ぼした。氏の心には、神の生物を此の世に發見せさせ給ひし敎に從へば、其の源泉を不正に輕侮するは爲し能はざる所で、總ての蓄類の現れし以來更に新に眞實てふことを呼び起された、と信じたのである。

宗敎倫理的運動の或るものは、往古に於ける菜食生活法の根原に復歸したものであることは疑ない。是に由て何人を問はず、人類文明の成立せる歷史を解する者は、此の文明人の營養に關する成書の起原及び其の

意味等に就ては、孰れの方面よりするも、宗敎哲學の根底より十分に了解し、遺憾なく說明せられたことを發見し得るのである。

　總て昔時の文明の反響大なりしは、菜食主義を旗幟として世界に現はれた人が宗敎の開祖であつて、改良家の祖先であつて、而して又道德的世界觀の代表者であつたからである。各々新に現はれたる幸福なる理想國は、人類の幸福に達すべき基礎として開放の恩典に浴し、精神の快樂を食物の節制に求め、生活に必要なる物の少量を取り、需用を制限し、生活のあらゆる關係に於ける自然法により、單純生活に復歸せしむるのである。かるが故に生活法の成書としては、萬般の方法が營養上及び之に關して單純なる生活の目的を達するが爲めに、眞誠に適合せしめらるべき鑑識、及び飮食物の單純なると適度なるとを要するのである。

　菜食主義は人類營養法の單純式及び德行的節食より起り、あらゆる時代の宗敎倫理の感想に深き基因を有するのである。人類の文明史は、德行を以て最大なる空間を包圍し、深く宗敎を道德的に確立することを敎ふるものである。然しながら宗敎の發達と共に常に宗敎の歷史を退歩せしめて居るが、吾人は未だ多くの道德眞理の殘遺せるを認め得るのである。如何となれば、人道はいづれにか完全なる道德を蓄へて居て、信仰的宗敎は自由の神靈及び自由の思想を生活のあらゆる地位に置き、最大なる權力を以て强迫を受け、それによつて害を被ることなく保護せられて居るからである。かるが故に吾人は例へば基督敎や猶太敎の如く、道德の目的に使用せられつゝ觀察せられ得る所の營養の制限に就ても、成書を見出すことは敢て驚くに足らないのである。

　猶太人の食則は、衛生の目的に使用せられたといふことに就ては、何等の知る所もないが、實際に飮食物を節したことは分つて居る。即ちエルザレムに避難したパッサーの祭日には、酸味のない麵包を食するを禁じ、其の媾和の日に當れる和睦祭には、此の禁を解く風習であつた。基督敎では猶太敎派とその倫理的方針

を異にして居るが、道德の本性として屢々說かれたる成書によれば、ローマン、カトリック寺院にては最も嚴に金曜日の肉食を禁じてあつた。其の後改革を加へたる新教の寺院に於ても、常にその敎法の方針として、亦著しく金曜日に於ける飮食物を節することゝした。最も著しき例としては、宗敎上精進潔齋沈默の修業を遂げて位階を得んとし、又は彼等が生活法に於て自然的調和の菜食的理想を達し得たる者には、授くるに高き位階を以てした事實がある。かく敎法上宗敎道德として菜食を實行するに至れば、一は哲學的道德によりても亦菜食法に到達するのである。

シノーペーのディノゲチス氏は諸人に先て菜食を實行せる人なるが、同氏の門下チニーケル氏は特に菜食に關しては群を抜けるもので、氏は全く要求なきを以て人道の最も尊きものと爲し、地球上のあらゆる重荷を卸し得たものとした。ディノゲチス氏より以來、社會は善良ならず、文明の發達は反て生活を華美にし、益々之を增進せしむるに至り、更に再び新なる道德家出で

て、前人と同一なる考案、若くは之に似類せる敎法を以て、道德的生活方針に向つて同一の實行を遂げんと試みたのである。然るに其の昔羅馬のアウグスチン氏の時代に於て人類の外形を高むることゝなり、一時食物を奢るやうになり、菜食といふは唯表面を繕ふ營養法の單一式となり、且つ其の觀察を知らしめ之を示す代表者が顯はれた。彼のゼチカ氏の如きは最も深厚なる道德的感覺者であるが、エーケル氏の唱道した食物の節用は總て生活の習慣に因るものと觀察し、禁肉の如きは人類の曲事と罪惡とを淸むる爲めに過ぎずと主張した。彼れの菜食的生活及び營養法を賞讃したのは、彼れの時代に於て營養に就て起つた一般の道德破棄に對しての反應である。

羅馬時代より破壞せられて移り來たゼルマン人種に至り、過美にして遂に敗れた文明の觀相は、恰も風の衝突の止みたらん如く淸潔平穩となり、それと與に當時の狀態に於ける菜食主義も亦數百年來繼續して消滅に歸したのである。

菜食主義の第一の研究の痕跡が再び起り來り、文明進步の再生が新に道德の階級を漸次適當に作り初て、其の絶頂に達せしめたのは、佛國に於て第十八世紀の後にして、歐洲中最も進步したる最も古き文明國より起り、そこより新に「自然復歸」をはじめたので、それは彼の有名なるジャン、ヤックス、ルーソー氏の時代であつた

此の哲學詩人は社會改良の大家として、當時の社會狀態に於ける華美と壞敗とを知つて、何を生活全體の改良及び道德外觀の改善、及びその完成に從つて共同生活の自然狀態に復歸せしめんと欲したか、又自然復歸は非文明的民衆の原始的生活關係の詮索とは、彼れには考へられなかつたので、要するに生活法單純の研究即ち共同生活觀察及び一般生活位置、並に生活習慣の調節を研究する目的の外には、何ものも無かつたのである。かるが故に彼は、學說としてある單純なる食料に就ては種々多樣なる肉食料の美しき調理法に比して、人間の心の本源なる思慮が菜食に傾くといふとは美食に比して相異れることを演說した。

佛國に於ては大革命を爲すに熱烈なる盡力家が疾風捲土の凄じき勢の裡に、他の方面には精神界に貢献するものありて、總ての生活關係に就て精神的快樂を以て多く安靜なる途によつて支配し、その範圍を完成するに努めた。是に於て其の時代に於ては一般の生活法の善良なる改良運動が成立して、當時に於ける營養法の各方面とも其の變革は頂上に達したのである。

ニュートンは千八百〇一年に菜食主義の新紀元を劃するものとして著名なる「自然復歸」と題する一書を公にした。此の時代には一般に於て個人主義の發達した時で、此の時代より以來、模範的文明生活法の標示は消滅してはゐなかつた。其の時代より十分に進步した今日に至つても、模範的世界の文明人民中、殆ど此の推移を取り、彼等の施行力及び彼等の內部の標示的運動も皆同一であつて、百年以前も二ヶ年以前も、人民の生活中の作用と其の時の活動と、菜食主義の倫理的根本思想とに就ては毫も異ることはないのである。

軍人崇拜熱と當今の女子

赤羽生

二三ヶ月前の某新聞に、或る女學校で其の生徒の將來の希望を聽いた所が、大多數は軍人の妻の志願者であつたと云ふ事が書いてあつた。勿論此れは一女學校の出來事に過ぎぬけれども、我輩は之を以て現今の滔々たる女學生が如何に激しく軍人崇拜熱に浮かされつゝあるかを知り得ると同時に又た一般婦人社會の大勢をもトするに難からぬのである。

近來、軍國主義の色彩が著しく凡ての方面に加つて來た、政治界と云はず、宗教界と云はず、教育界と云はず、思想界と云はず、何れも軍國主義の色彩が多く爲つて來た。早稻田の大隈伯は近時學生の風儀秩序の甚しく紊亂せるを慨して、是を匡正するには是非共軍隊主義の教育に依らざるべからず抔と言つて居るし、又先頃出たる牧野文部大臣の訓令にも矢張り大隈伯の言ふ樣な意味がホノ見へるのである、今や軍人得意の時

代だ、軍人專横の時代だ、軍人で無ければ夜も日も明けぬと云ふ時代だ、凡ての社會が軍人崇拜熱に浮かされ、軍人歡迎に熱狂しつゝある時代だ、彼のラッパ節と稱する卑猥危險なる俗謠が市井の流行と爲り無邪氣なる少年少女すら『島田くづして揚卷に、結ふて看護婦志願して、軍人介抱して見たい』と大聲擧げて歌ふて居る時代では無いか、かういふ時代であるから獨り女子のみが此の傾向を免れると云ふ譯には行かぬ、彼等が軍人を以て理想の男子と思ふのも強ち無理は無いのだ。

古來何れの國家に於ても戰勝後、軍人の驕傲と腐敗とは必ず來るものだ、此れは歷史の證明する處で、普佛戰爭後の獨逸軍人の墮落を見ても分る話しだ、而してかゝる現象は單獨に軍人夫れ自身の自負心と虛榮心から起るのでは無くして、社會の先達と稱する夫の愚なる識者連が之を煽動し之を持上げるから來るのだ、頑迷と無識とは軍人の專賣だ、彼等は己れ達の御陰で日本は露西亞に勝つたものと心得て居る輩だ、己れ達が

無ければ日本は亡びるものと己惚れて居る馬鹿者だ、其の馬鹿者共を煽動し崇拜するのは、恰度火に加ふるに薪を以てすると同じで、彼等の増長するのは正に理の當然である、故に、軍人が跋扈するのは軍人夫れ自身の罪斗りでは無くして、社會の燥狂迷愚の罪大に與つて力ありと我輩は斷言して憚らないのだ。

元來世間多數の女子は虚榮の動物だ、派手好きな動物だ、綺麗びやかでそして花々しい事を好む動物だ、であるから彼等が軍人崇拜てふ時代精神に動かされて軍人を理想の良人と思ふのも無理は無いのだ、無理は無いけれども而かも彼等は愚劣だ、成程軍人は立派だ、勳章を胸間に輝かして佩劍の音勇しく、馬上優かに乘り爲したる英姿は颯爽たるものだ、婦人ならぬ我々でも滿更ら惡くは思はぬ、乍併、歴史の吾人に敎ふる所によれば、彼等は自由意思の無い奴隷に過ぎぬのだ、上長官の手足と爲つて働かねばならぬ一種の殺人機械に過ぎぬのだ、其の奴隷や殺人機械を崇拜し艶羨して之を理想の男兒と崇め奉るに到つては女學生たるも

のゝ愚や實に及ぶ可らずと言はねばならぬ、況して彼等が軍人を理想の男子とする其の理由が、軍人其人の人格精神にあらずして、唯だ外形の綺麗びやかなる點、即ち胸間の勳章や、金モールや、エポレットや、年金や、位階や、佩劍の音や、馬上の雄姿に、あるに於ては實に呆然たらざるを得ないでは無いか、中には何の理由も無く、世間の軍人崇拜熱に浮かされ唯だ何と無く軍人を好いたらしく思つて居る女學生も尠くはないと思ふのだ。

女子は先天的の事大國民だ、獨り朝鮮國民斗りを責むる譯には行かぬ、彼等は權力に事へるのだ、金力に事へるのだ、位階に事へるのだ、而して其等の奴隷、骨董品、玩弄物、肉饅頭を以て甘んずるのだ、而して果敢ない一朝の虚榮に代へるのだ、眞に笑止千萬の次第だ、思ふて此處に到ると、我輩は女子を斯く迄に卑屈柔弱ならしめたる日本の奴隷的道德に對して深き痛恨無きを得ぬのである。

今の紳士閥は男女共同の敵だ、彼は男子に於て最も大

切なる獨立の人格を奪ふと同時に、女子に於て最も神聖なる愛情を奪ふのだ、貞操を奪ふのだ、見給へ、古來平民階級の女子が如何に多く紳士閥の爲に、其の貞操を汚されたかを、藤原氏や、源平二氏や、徳川氏及其末徒や、馬鹿華族共に汚されたる平民階級の女子如何に多きかを思ひ來れば我々男子でさへも怒髪天を衝く慨がある、況んや女子自身に於てをやだ、若し今日の女子にして少しでも氣慨があるならば、汚辱を被りたる多くの姉妹の爲に今の紳士閥に對して堂々と戰を挑まねばならぬ筈だ、女子革命の義軍を起して我々に自由を與へよ然らずんば死を與へよと絶叫せねばならぬ次第だ、ソレに何ぞや、此の終天の仇敵たる紳士閥に對し、紳士閥の防護者たる軍人に對して媚を賣り情を賣るべく腐心しつゝあらうとは、あゝ何たる無神經だ、何たる愚劣だ、何たる見下げ果てたる了簡だ、此れだから日本の女子は何時迄も紳士閥の奴隷、肉饅頭たる運命より免れ得ぬのだ。

今の女學生が軍人の前に跪くのは即ち紳士閥に降伏する所以だ、勿論、今の女學生の多くは紳士閥の出身である、從つて彼等が紳士閥の徒を好むのは元より理の當然であつて、毫も不思議は無いのだ、乍併紳士閥非

紳士閥に拘らず、苟くも權力金力を以て女子の神聖なる肉體を自由にせんとする者は凡ての女子の共同の敵であると云ふ事を知らねばならぬ、何の國に於ても軍人は時の暴惡なる權力階級、不都合なる社會組織を防護する一種の機械に過ぎぬのであつて彼等の眼中には平民の利害休戚抔は全然無いのだ、而して彼等の眼に映る女子は人間では無いのだ、平民階級をば紳士閥の奴僕の如く心得て居ると同時に、女子をば男子の從屬物の如く思惟して居るのだ、如此自己を物體視し、奴隷視し、肉蒲團視する紳士閥の走狗に頭を下げて神聖なる肉體を賣るのは、取も直さず仇敵に身を任すと同じだ、常盤御前は自分の子の爲め涙を飮んで仇敵清盛に淫を賣つたが、今の女學生は一朝の虛榮の爲に仇敵たる紳士閥の肉饅頭を以て甘んずるのだ、實に迷惑の極と云はなければならぬ、あゝコンナ事で果して何時女子のエマンシペーション(解放)が行はるゝであらう。

我輩は嘗て友人と共に、吉原の夜櫻を見物に行つた事がある、其の時多くの妙齢なる女子が隊を組んで青樓の前をぞめき歩行きつゝあるを視て深き感慨に打たれた、而して其の時我輩はかう思ふた、彼等は正に彼等

自身を侮辱しつゝあるものである、自己の面上に泥を塗りつゝある者であると、思へ遊廓は不幸なる女子の牢獄では無いか、地獄では無いか、娼妓と云ふ世にも憐れなる奴隷の展覧會では無いか、其の牢獄、地獄を女子自身が見物して恰から見世物でも看るかの如く戯れて手を拍つて笑ひ興ずると云ふことが常識を備へたる女子の出來る業であらうか、自分等の姉妹―爾り姉妹である―が不幸にも此の世ながらの地獄に沈んで此の世からなる地獄の苦を嘗めつゝある時に、之れを見て喜んで笑ひさゞめくと云ふことが人情を有する女子の為すべき事であらうか、如何に無智無學とは云へアンマリナ亂暴では無いか、自ら侮つて後、人之を侮ると云ふ諺の通り、如此醜恥の事をして恬として耻ぢざる女子が男子の輕蔑を買ふのも無理は無いのだ、此れでは男子に踐まれても、毆られても、蹴られても、肉蒲團視せられても、玩具視せられても苦情を言ふ權利は無いのである、乍併、如此は惟り無智無學なる市井の女子計りでは無い、所謂る女學生と稱する多少の教育ある女子も多くは此の亞流であるのだ、彼等が依然として自己の地位を自覺せず、虚榮の夢に迷ひて紳士閥の徒に俛首帖尾して居る限り、矢張り女郎屋を素見す所の無賴女子と何の擇む所は無いのである、有學と無學の差こそ有れ、彼等は共に貴族、富豪、軍人の奴隷であるのだ、床上の飾物であるのだ、肉饅頭であるのだ、あゝ女子諸君、卿等は何時迄昏々として長夜の眠を貪つて居るの乎。

乍併、翻つて思ふ、女子をして斯く迄虚榮に走らしめ、斯く迄金力や權力を崇拜するに到らしめたのは、實に社會の罪ではあるまいかと、我國古來の習慣と在來の女子道徳とは何處迄も女子を男子の從屬物として教へつゝあつたのだ、女子はどうしても男子に依らねばならぬ、男子の力に便らねばならぬ、女子は到底獨立の出來ぬものとして待遇しつゝあつたのだ、如此習慣と教育の壓力の為に躰力智力共に弱くならしめられたる女子は、勢ひ力強く智恵深き男子に賴らざるを得ざるに到つた、而して其の結果として彼等は多くの場合に於て力と智恵との表標とも見るべき金力と權力とを崇拜せざるを得ざるに至つたのだ、然れば今日の時代に於て柔順と卑屈とが女子の生命であるのは正に然るべきである、而して現社會の根本に横はる社會組織の缺陷は當然に黄金萬能の大魔風を吹き起す、其の魔風に中てられて多くの青年士女は精神的に死んで仕舞ふ、

夫と同時に貧富の懸隔は益々甚しくなる、生活の困難は愈々激しくなる、勢ひ如此であるから女子が生活の保障の比較的確實なる貴族や金持や軍人を好むに到るのも無理は無いのだ、故に金力や權力や位階を愛する女子の虚榮心も深く其の底を捜つて見ると其處には悲慘なる生活問題が含れて居るのだ、社會の壓制が其處に根を下して居るのを見るのだ、今日の社會は愛で男女の結合の出來ぬ社會で、男女を結び付くる唯一の連鎖は金力と權力だ、如何に相愛する男女はあつても若し其の男に金力と權力とが無ければ相結合して家庭を形造くる事が出來ぬ、よしや形造れるにしても善美なる生活は出來ぬのだ、サア斯なると虚榮心の強い多くの女子は勢ひ愛する男子を捨て丶金力と權力の前に跪かざるを得ぬのである、見給へ、男子でも意思の弱い信仰の無い輩は滔々として金力權力の前に屈伏して多年の主義主張を飯米の資に代へるのが多い社會では無いか、して見ると意思が弱くて、感情が強くて、そして虚榮心の多い女子が相率ゐて紳士閥の妻妾たらんとするに到るのは敢て怪むに足らぬ。我輩は斯く思ふと女子の憎むべきを見ずして寧ろ憐むべきを見るのだ、而して清淨無垢なる女子を斯程迄に墮落せしめたる現

社會を咒詛せずしては居られぬのだ、從つて此の社會組織を根本より改革して、女子にも男子にも獨立の職業と地位と生活の保障を與へんことを主張する社會主義を信せざるを得ないのだ、社會主義の社會こそは眞に愛に依て自由に男女の結合の出來る愉快なる社會である。

之れを要するに女子社會の革命は目今の急務だ、而して之を成し遂げるにはどうしても女子夫れ自身の自覺に待たねばならぬのだ、我輩は有識にして勇氣ある女子の奮起を望むこと切だ。乍併、若し今日の女子諸君にして依然として虚榮を夢み、權力を崇拜し金力を有難がり、軍人を嬉しがつて居る以上は、女子の解放は到底駄目であると覺悟しなければならぬ。そして諸君は遺憾ながら永遠に現在の紳士閥、男子閥の奴隷を以て甘んぜなければならぬのだ、肉蒲團を以て甘んぜなければならぬのだ。

軍人崇拜熱は現今の時代精神である、故に獨り女子のみを責むるは或は殘酷であるかも知れぬ、が唯だ我輩は次代の國民を作るべき責任者として現今の女子諸君に待望する所多きが故に敢て此の苦言を爲したのである。

新刊紹介

▲英譯良人の自白第二巻（アーサーロイド譯）

近頃第二巻の英譯漸く成りて、有樂社より世に出だされたり。原著者木下尚江君の筆致を其まゝ英文に譯さんとして、却つて往々失敗に畢りたる箇所なきにあらざるも、尚ほ日本英學生の參考書として吾人は多くの價値を認むるもの也。本卷の内容は原書上篇の、俊三が厩川を下りて東京に赴く所より始まり、中篇九十一頁目の、俊三が母の死期に逢ひ得ざりしより自己を殺人犯者として非常なる煩悶に陷ゐるまでを譯出せり。譯者は近く續刊すべき此の第三卷に於て原著三篇の全部を翻譯し了るべしといふ。見本として左に松野報の「ダイヤモンドの指環」一二節を抄錄す。（四六版二五四頁、價七十錢、麹町區有樂町三の一、有樂社發行）

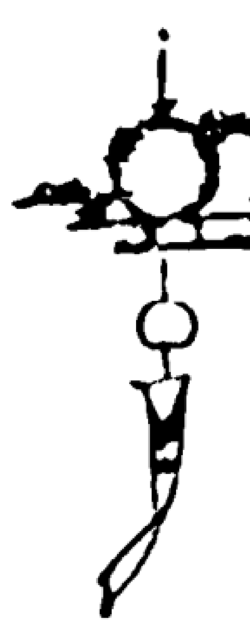
"Ha! ha!" laughed Kimura, much amused. "You are so sympathetic with everybody that I wonder how much you lose by these boarders who never pay."

"I do not care about it at all. Yesterday I thought I would go on board to see her off, but I had to excuse myself at the Hatoba as I could not bear the grief of parting. Thereupon, Kimura San,"—here the landlady glanced round to make sure that no one was within hearing, and then standing up produced something tied up in a *fukusa* (small square of silk used for wrapping up a valuable).—"Now, Kimura San, look at this a moment."

Kimura threw back his cape and unfolded the bundle respectfully. Something flashed! there lay a brilliant diamond! a ring!

▲女子時事新聞（第七號七月十五日）編輯は悉く妙齡婦人の手に成り、而して其の標榜する所は「婦人問題は婦人自から解決するに非ずんば不可なり」てふ主義に在りといふ。果して然らば吾人は滿腔の敬意を拂ふに躊躇するものに非ず。然も此の「婦人問題」てふ語は、動もすれば婦人自身にすらも咀嚼されずして了ることあり。吾人は本紙の編輯者が此點に於て今一層の用意をなすにあらざれば、本紙も亦他の坊間の子子と同じく、存在の理由を失はんことを恐る（毎月三回、四六四倍形八頁、一部五錢、麹町區飯田町六の二五、女子時事新聞社發行）

▲ヒラメキ（第一號七月十一日）メラメキ出づ。青年文士の氣焔の吐き場所也。電光一閃のヒラメキに腰を拔かすものは誰？。膽をつぶすものは誰？。軈て來るべきハタメキに、ヒラメキよハタメキよ、あらゆる天地の邪惡に殺到して、其の簇つく夕立に世を洗ひ去れ。苦熱をも洗ひ去れ。因に、例の恐ろしき名の「火鞭」は本誌に合併して了ひたり（月一回、四六二倍形四八頁、一部十錢、本郷區駒込千駄木町一一三、ヒラメキ會發行）



由分社より

記

△堺君は此頃小田原海岸の加藤氏別莊へ行つて彼の世界文壇を驚かしめたるシンクレア氏の名著「ジャングル」を翻譯中だ。寒いほど海風が座敷に吹き込んで、仕事をするのが實に愉快だとの事。これではイヤでも應でも、一日も早く吾々の前に其の「社會主義名著文庫」の第一編を投げ出して吳れるに違ひない。

△先月はゴタクサ紛れに、とう〳〵本誌の發行が三日程おくれて了つたので、讀者からは催促が來る、賣捌の方は手答が狂ふ、大分營業部に迷惑を掛けて了つた。そこで今月は注意して二十日に原稿を〆切り、廿二日に悉皆の原稿を活版所に廻はした。これではイクラ何でも期日におくれはすまい。因にいふ、自今毎月二十日を以て嚴重に編輯の〆切日と定めた。甚だ勝手ながら寄稿者諸君はどうぞそれまでに着社するやう御送りを願ふ。

△今回本社本箱の夏季掃除を爲し殘本を處分するため、左記雜誌は、本社直送の分に限り特別大割引を以て江湖に頒つことにしました。合本（美麗なるクロース製）は進物用として、各號のは新家庭主義の傳道用として、聊か諸君に便利を與へ得ること、信じます。

●家庭雜誌減價販賣

▲第二卷合本（原價八十錢）減價五十錢郵稅共
▲第三卷合本（原價八十錢）減價五十錢郵稅共
▲第三卷各號　減價三錢五厘郵稅共

mori e Kari ni itta.

Suruto atatakai oka no ue ni futotta ōkina Tanuki ga hinatabokko o site orimasita. Ryōshi wa "yoi Emono gozannare" to tachimachi migamae site Zdon to ippatsu hanachi masita, suruto Tanuki wa oka no ue kara koro-koro to ochi te itta. Ryōshi wa "simeta" to sakebinagara ichimokusan ni tonde itte mimasitara Tanuki wa kosi no hone o utareta to miete, kurusigatte sikiri ni oka e hai agarō to omotte mogaite ita. Ryōshi wa "mohaya korenaraba daijōbu da, nigerareru simpai wa nai, dore hitotsu koyatsu o sibaru mono o sagasite koyō" tote kusamura no naka de tsuta no tsuru o karikonda. Suruto chōdo soko ni wa Kiji ga sono Tamago o attamete otta mono to miete Kiji no atama mo tsuta mo issio ni kari totta kara tamaranu, muzanya, Kiji no atama wa Tsuta to tomo ni karare te soko ni wa kare no tamago ga 20 bakari atta.

Sokode Ryōshi wa Tsuta no hoka ni omowanu Emono Kiji no kubi no toreta no to sono Tamago to o.motte Tanuki o sibari ni oka no sita e kaette kita. Tanuki wa kosi ga tatanu no de kurusimagire ni daibu tsuchi o hotta no de Nagaimo ga 3 jak amari horete ita. Ryōshi wa hitori "hok, hok," yorokobi nagara Tsuta no tsurude Tanuki no yotsu asi o sibari Kiji to Tamago o Ami no naka e ire Nagaimo o burasage te ie ji o isoida.

Sōsite Ta no hosomichi o yuku to soko ni wa mata Ta no naka ni Dojō ga 100 bakari uja, uja, otta. Ryōshi wa "kore wa umai" to iinagara hadaka ni natte juban o nuide sokkuri sonomama Dojō o sore ni tsutsunde Uchi e motte kaette sassoku Tanuki-jiru, Dojō-no-Tamagotoji, Nagaimo-no-nitsuke, Kiji-no iritori o site takusan Nakama o yonde oisiku gochisō o tabeta to iū hanasi da, nanto Minasan hitotsu no teppō no Tama de konna ni Emono ga atta to wa Umai hanasi da.

Hito-ktyi, Hito-hde.

HKAO SYOO.

*Aa zyitsuni atsk natte kita. Atssa no kulusyimi ni naite ilu no wa semi to klumahiki to bok bakali zya al mai.

*Kono atssa nimo meges *Esperanto* no lyuukoo wa hizyoona mono da. "Yomiuli", "Nilok" nazo wa kisotte sono kizyi o nosel syi, sono hoka no syimbun ya zasssyi mo wazawaza *Esperanto* Ran o mookete il no ga al.

*Gogak netsu no sakanna no wa yolokob beki koto de al. Kono oli o hazsaz Loomazyikai mo ooini katsdoosyite mozyi no kakmei o ityinityi mo hayak togel yoo ni syite molaitai mono da.

*Loomazyi-kaki to ieba, bok no kakikata ga tyittomo sadamalaz ni ilonna toppina kakikata bakali sulu no de syokun wa sazo akilete ilassyal koto daloo. Bok wa mata naltake iloilona koto o yatte minakeleba honto no benlina koto wa miidasalenu to omotte ilu no da.

RÔMAJI RAN

Karada no Tame.

Hirai Kinza.

WATAKSI kata wa 20nen kono-kata, ō-arashi de ame no fukikom toki no hoka wa, yosari ne mas ni amado wo simeta koto wa ari masen. Fuyu no tadanaka, ō-yuki no fur yo demo amado mo *shōji* mo akehana-site, iye no heya-beya kaza-tōri no yoi yō ni site ne-mas. Tsune no amefuri ya, ō-yuki no yor wa kotoni *kūki* ga utsukshii des, kara asita ni oki masita toki nantomo iye nu yoi kokoro-motsi ga itasi mas. Samsa no tame ni kaze wo hik de arō to omou kata mo ari mashō ga, nar-hodo karada ga hiyete wa nari ma-sen; kara kubi yeri sita wa koppori to atatakak site, kawo wo tsumetai kaze ni atete ine masreba suya-suya to yoi kokotsi de nerare mas.

Kono-aida tsinomigo ga hasika wo wazrai masita ga, yahari hir mo yor mo kak itasi masita, kara hayak sukkari to naori masita. Yamai no hagesii hi mo 2ka hodo de sumi masita ga, ane-musme no tsisai toki mo sono tōri de makoto ni karui hasika de ari masita.

Sikasi koko ni hitots kokoroye-okbeki wa, Tōkyō wa tsutsi yawa-rakak hai no yō des, kara siba-siba tsutsi-bokori no kumo wo maki-age mas. Sono nakani wa osorosii moro-moro no *baikin* ga ari mas, kara kore wo suutewa tamari masen. Sokode hokori no yo wa *shōji* dake wo simer koto ni itasi ori masu.

Wataksi ga kak sru wo isamer hito wa, yor no *ki* wa yok nai to iware mas. Kore wa daremo kimat-te mōs sata des ga, skosi kangaure ba, ikani to wo tatete mo, iye no naka mo yahari yor de atte, sikamo fuyu nareba naosara, kotatsu ya, hibatsi ya, hito no kutsi yori hakidas kusatta gas ga komori mas, kara yamai ni kakari yasui wake des. Utsi mo soto mo onaji yor to sureba, utsuksii *ki* wo tayema nak kayowas ga yorosii to zonji mas.

Ima hitots wa, yo ni dorobō to mōs mono ga atte, kare tokak haba-kari mo nō hito no utsi ye hair noda sō des. Wataksi kata ni wa totte-yuk beki hodo no mono wa ari masen, kara tonto kamai masen ga, asa oki mas to inu ya mata neko ga futon no suso ye yadori ni mairi mas, kara kado ya *genkwan* no iri-kutsi ni hamer sar-do (kōsi-do) wo en-gawa no shikii ye hamete yasmi mas. Nao dorobō no kur wo ska nu to araba, suzu demo tsuketa raba yokarō to omoi mas. Tomokak ata-rasii *kūki* wo sui mas, kara hir hiita kaze mo hito-yosa de naorimas.

—“ *Rōmaji* ” *dai 10 gō.*

Hitotsu no Tama de Emono Itsutsu.

Musasi, Kawagoe.
Uyemura Tatsuyo.

Oshū no yamaoku ni hitori no Ryōshi ga sun de ita. Aru tenki no yoi haru no hi ni teppō——sore ni wa tama ga hitotsu yori hoka ni komete nai no da !——o katsuide

家庭雜誌第四卷要目

第一號（一月一日）

△理想の影（詩）△我輩の家庭主義（堺利彦）△眞心のお年玉（安藤生）△婆アの皮（深尾韶）△臺所廢止論（中尾傘瀬）△動物虐待税（祿亭生）△花言葉（久田二葉）△日本服の將來（韶）△炬燵雜談（堺の上の柿、エスペラント語、男子中心の態度）（彦）△老父母を迎ふるの記（西村渚山）△北海道の冬の生活（韶）△ローマ字欄等

第二號（二月一日）

△死にゆく母に代りて（詩）△醜惡なる家庭（深尾韶）△謎の指環（西村渚山）△滑稽の研究（中尾傘瀬）△火の中に住むの記（竹内余所次郎）△春の料理（石井泰次郎）△婦人と園藝（久田二葉）△火州庵小信（まがりかは生）△炬燵雜談（旅行の利益、宿屋と我家、能樂見物、狂言「釣針」、家庭の厚氷、嫁さんの盗み食、女天才の束縛、柔順の美德？、傍若無人の言、革命的戀愛）（彦）△雪姫物語（上）（白柳秀湖）△ローマ字欄等

第三號（三月一日）

△僕の夢（彦）△婦人と經濟的平等（堺利彦）△春雨日記（ふかを生）△反抗の聲を擧げよ（深尾韶）△女子の威嚴に就いて（中尾傘瀬）△家庭時言（久田二葉）△臓器料理（大石祿亭）△炬燵雜談（異人種結婚、金子コンガー夫人、波蘭の珍客、慾望は侮辱なり等）（彦）△思ひも寄らぬ便り（安藤曲川）△初春の草花（二葉）△雪姫物語（中）（白柳秀湖）△春の料理△ローマ字欄

第四號（四月一日）

△生涯幾度の花（利彦）△貞女道を批評す（中尾清太郎）△鳩と社會主義者（堺利彦）△聖書と婦人の權利（山口孤劍）△春日郊行の記（堺利彦）△余は寧ろハイカラ女學生を取る（目黒の里人）△我等の胃袋（上司小劍）△天つ女神の歌（秋水女史）△日本服論（竹内余所次郎）△新案料理數品（大石祿亭）△西洋の野遊び△鶯餅の拵方△雪姫物語（下）（白柳秀湖）△人不知（小說）（堺利彦）△夫に家庭雜誌を讀ませる法△貧と愛情（西村渚山）△四月の馬鹿遊び△羅馬字欄

第五號（五月一日）

△春愁（利彦）△故山の情話（上）（堺利彦）△日本婦人の貞操を疑ふ（中尾傘瀬）△貧者の心得（大石祿亭）△わが從妹の將來（久田二葉）△なまけ者の福音（白柳秀湖）△人情なき教育者（安藤曲川）△老友の詩（堺利彦）△猫の爪（小說）（西村渚山）△婦人新論（第一章）（堺利彦）△日米結婚の新家庭（金子喜一）△聖書と婦人の權利に就て（中尾傘瀬）△本誌の寄書家△チラシ配り（やす子）△ローマ字欄

第六號（六月一日）

△自然の保險（利彦）△ハルマン翁の入獄（堺利彦）△ハルマン翁の學說（堺生）△米國に於けるゴルキー（金子喜一）△ゴルキーと米人の僞善（幸德秋水）△女學校に交際科を設くべし（中尾清太郎）△菜食主義（幸德秋水）△菜食主義に就て（堺利彦）△紀念繪葉書買損れの記（赤羽生）△登山の感（中尾傘瀬）△父の婚禮（上司小劍）△いもずしの拵方（石井泰次郎）△墓場の教訓（月の輪）△此頃の草花（久田二葉）△飲料種々（大石祿亭）△大堀若太郎の朝飯（堺利彦）△笑と衛生（眞世禮清）△酷遇されたるゴルキー（金子喜一）△記者雜談△家庭と養蠶△新刊紹介△ローマ字欄

第七號（七月一日）

△棗と秋海棠（彦）△磯谷家の最後（西村渚山）△菜食論（一）（加藤時次郎）△暗汁會の記（蓮葉生）△田園より（久田二葉）△育兒所感（中尾清太郎）△鴟の子（上司小劍）△二箇の犠牲（荒畑寒村）△同病相憐の記（上）（有隣生）△屠牛を見る（堺生譯）△自殺せんとしたる女學生に就て（中尾傘瀬）△眞ア坊のお友達（眞子）△米國の農園勞働（延岡常太郎）△現實の理想郷（深尾韶）△菜食主義に就て（堺生）△新刊紹介△由分社より△ローマ字欄

本誌代價	一部 金十錢 六ヶ月前金五十五錢 一ヶ年前金 壹圓 （何れも郵税共）
廣告料	特別一頁 十圓 普通一頁 七圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。

▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハツキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治三十九年七月三十日印刷
明治三十九年八月　一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人　堺　利　彦

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中　村　鋼　助

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行所　由分社

大賣捌所　上田屋　東京堂　良明堂　東海堂

堺利彦編輯　毎月一回一日發行

社會主義研究

▲第一號 には社會黨の經典たる共產黨宣言及び其筆者マルクス、エンゲルスの傳を載す

▲第二號 にはクロポトキンの無政府主義の哲學及び之と社會主義との關係を說明す

▲第三號 には列傳體を以てサンシモン、フーリエーよりラサール、マルクスに至る社會主義の發達を敘す

▲第四號 には紙面の全部を擧げてエンゲルスの名著『科學的社會主義』を譯載す

▲第五號（八月一日發行）には△政治的總同盟罷工△總同盟罷工の歷史△硬軟兩派の主張△ベーベル傳△エンゲルス逸話△純正社會主義の哲學等を掲ぐ。ゾラの小說『木芽立』は愈よ進みて同盟罷工の活劇に入れり。

價一部十五錢、五部前金七十錢、十部一圓卅錢

發賣所　東京市麴町區元園町一丁目　**由分社**

獨乙語出教授を望む

姓名は由分社編輯部へ御問合せを乞ふ

寒山鐵筆化緣

一石印　三顆

刻料印材共金壹圓五拾錢御送付ノ日ヨリ十五日間ニ郵發ス

東京下谷區下谷町一ノ一　**山田寒山**

一印菓　落雁製唐木帙入　三十錢　廿五錢

東京下谷區下谷町一ノ一　**寒山寺**

●歯科治療 自午前八時 至午後六時●

神田區須田町二十六番地

歯科醫 吉瀬才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

◉眼科診察 毎日午前◉

京橋南佐柄木町五
（電話新三四五八）

川上眼科院

外科皮膚病 梅毒 痔瘻 外科的婦人科 尿道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際 出雲橋 加藤病院

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸 毎月曜午前中

産科 婦人科

横濱市眞砂町二丁目廿六番地

朝長鷹一郎

診察 毎日午前



御用諸學校

東京神田裏神保町

安藤商店

電話本局四八四番

改良ロンテニス

二重枠ラケット一組

一號品	一二、五〇〇
二號品	一一、〇〇〇
三號品	八、八〇〇
四號品	七、四〇〇
五號品	六、七〇〇
六號品	五、七〇〇
七號小學用	四、七〇〇
八號婦人用	六、〇〇〇
九號婦人用	七、〇〇〇



東京神田裏神保町五

S.A. 安藤商店

ピンポン室内テニス

一號	一箱	一、二二〇
二號	同	一、五〇〇
三號	同	一、六八〇
四號	同	一、八三〇
號外	同	〇、八八〇

改良テニスネット

一號	一張	四間半	一、七五〇
二號	一張	五間半	二、二五〇
三號	一張	六間	二、四五〇
四號	一張	七間	二、九五〇

ゴム入フートボール

二號	一個	四、〇〇〇
三號	同	四、五〇〇
四號	同	五、〇〇〇
五號	同	五、五〇〇
六號	同	六、〇〇〇
七號	同	六、五〇〇
八號	同	七、〇〇〇

體操遊戲器械一切





東京神田裏神保町

安藤商店

電話本局四百八十四

後附四

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店